慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史記評林諸版本志稿
Sub Title	
Author	山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.345- 392
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史記評林諸版本志稿

はじめに

林は此等通俗諸書に比し、批点の周到さ、 書ではあっても、 あり、批点は概して編者の恣意に随い、幼童初学者の為の啓蒙 を得んが為に粗製した俗書で、評林の驥尾に付す節本・ 及んで簇出した。しかし、多くは、 とし、その体式に依倣した凌稚隆の史記評林に至って高潮に達 部の諸書に亘るが、史記について言えば、 点旁抹眉批を附し、 明代中葉以降、 陸続と刊行され流布している。 一家の言を成した著述では殆ど無い。 殊に万暦年間に入ると、 更には前輩の論評注釈を彙輯標記した評注 書肆が時好に阿附し、 〜ば、楊慎の史記題評を魁 (注1) かかる学風は経史子集四 輯評の浩範さに於 文章の妙処佳処に圏 史記評 類本で 明末に 焦竑の

山城喜憲

学の高峯を占むる編者である。て、、又、テキストの精善さに於て卓出し、巍然として明代史記

褒の言ではない。 ではない。 変の言ではない。 変の序文に於て「以棟(変)と為史記也、其言則

統譜、 述知、 志に拠る。)、太史華句、年序刊湖州府)、太史華句、 り資政大夫刑部尚書を追贈されている。編著書に史記評抄(又 歴て南京刑部員外郎に任じ、 尤も詩に長じた人物とされる。 任じ、後、常州府知に至っている。 名、史記概)、 と号し、嘉靖三五 嘉靖一九 遇知、 文選錦字、名公翰藻、 遂知の四兄がある。 (一五四○)年の挙入、全椒県知、沔陽州 **鳳笙閣簡抄がある。** (一五五六)年の進士で、 両漢雋言、 後年、 文林綺繡の編著がある。 父約言は、 長兄廸知は、 稚隆は約言の季子で、 曾孫義渠 左国腴詞、 史漢評林、 字は季黙、 初め工部員外郎に (験前)の 名世類苑、 字は稚哲、 増定史纂 殉節によ 藻泉と号 知等を (以上乾 廸知、 万世 辉泉

慍如其父耳。焉知終不得荐、無因以慰母乎」 (鳳笙閣簡抄巻四 雅能安之、而母之心未知其如父否也。 謂父母之心能釈然者、又豈其情乎。通塞在天、伸屈有命、 如母乎否也。亦未知其知父之或安於母、母之或不安于父否也。 以試而望其得薦者、 るも不第に終った。父約言は「士之明経起家者、従郷薦始抱経」 問弘博」(『県志巻九人物志例] と称されたが、不幸、問弘博」(清康煕二〇年序刊等程)と称されたが、不幸、 たようである。 を促がすが如くである。 示季男稚隆) 人言稚隆巻已入選、失其巻之三、而不果薦。信有之命也。只消不 稚隆はこれら鳥程凌氏の華冑として生まれ、 試事竣、 と父親として切情を伝え、鎩羽の子を慰諭 而復走韓魏者也 これを約言は「聞汝厭心于南 而謂父母之心不深望者、豈其情乎。 士之情也、 稚隆は南試を厭い 試者之心与試者父母之心、 倘不遇而奪釜鬲于塗、 試者之心未知其如父乎、 順天試に応じんとし 欲改北以求試。 「天資俊爽、 望既払、 郷試に応ず 又将誰往 し感奮 父亦 而 坣

> 無視し、 未備、 平。 評林に限ってみれば中国本国に於てよりも寧ろ日本に於て、 ずしも後代評価を得ているものではない。 評注測義七○巻及び五車韻瑞一六○巻をのみ存目に留め、 林一〇〇巻・漢書纂六七巻・春秋左伝評注測義七〇巻 ある。史記評林一三〇巻・史記纂二四巻(或は一二巻)・漢書評 至ったのは史漢左伝等の諸儒評説を蒐羅編纂したことに於てで しろ消極的であったようでもある。 嘗一日去手」(所府志卷二〇人物三)と評さるるを鑑れば挙業には 中らず、例頁に甘んじた。「絶無他い、 節略文収載)と訓誡している。 而之他也。」(同、尚、出入があるが、 た影響は甚大なものがある。 意味した程に弘通流行しており、 戸時代を通じ再三板行が重ねられ、 ○巻)・五車韻瑞一六○巻を遺している。 「史記評林ヲ史記ト云」とある如く、 張舌尚在、 而舛謬弥滋、且往往杜撰」と酷評を下している如く、 存目に著録されたる二書も「冗砕不足観」、「名為広所 和壁誠真。 計其常理、 しかしながら稚隆は遂に郷試に 我国近世の学術文化に及ぼし 彼が後世聊か名を留むるに 弁疑書目巻之上略名書目に 似可 盛明七子尺牘註解卷五 史記といえば史記評林を 独愛典籍雌 しかしながら、 四庫提要は春秋左伝 収 捷于 南 (或は三 不必 未 江

ば 功業は其の学を継承するものである。 先志」と見ゆる如く、 黙有概矣。 徐中行の史記評林序(約頁参照) 父約言の史記抄、 加以伯子稚哲所録。 後氏の家学は史学とされ、
 伯兄廸知等の輯録せる諸名家批評 殊致而未同帰。 に 自序 「凌氏以史学顕著。 (35頁参照) 以棟按其義以成 稚隆が遺した

以償疇昔之志」と述懐する。 象所纂の史記発徴に鑑み、自らも笈を負い、 古歙の汪氏、維揚の張氏の助成を得、万暦二(一五七四)年に つつ得た諸論評を彙纂して、本書は成った。上梓に当っては、 同四(一五七六)年に刊成、 「編摩歳月形労神悴、 識者史家を捜訪 聊

勘して各本の連絡を見極めた高論である。 容を分析し、諸板本に就いて体裁性格を述べ、 を精査することによりテキストの系統を探り、諸注釈の体例内 的研究第五章第二節四に該治なる論攷があり、 史記評林の文献学的研究には、 水沢利忠博士の史記之文献学 字句の出入異同 文字の異同を校

間の系絡を明らかにすることを主眼とした解題目録であり、各 及ぼすことは早急には不可能であり、主要なる儲蔵機関所蔵本 得れば至幸に思う。調査に当っては博捜を宗としたが、何分見存 本について特に刊・印・修の甄別に意を用い、知見諸儲蔵本の特 本の数は、取り分け和刻本に於て夥しく、そのすべてに調査を 徴並に所在を畢記しておいた。些少なりとも水沢論文を補足し に限らざるを得なかった。爾後、追而拾補していく所存である。 本稿は管見に入れる史記評林諸本の形態上の異同、 及び各本

史記評 林目録

- 知見の版本は版種にして次の二一種である。
- 異にする場合(19)、及び冠称を有つ場合(14・17)には全記する。 書名は初出の原刊本のみ全記し、以下「同」字で略す。 但し、内題を

- 「同」は全て「史記評林」の略で従って15・16・18の内題は「史記評
- 「又」は同板後修後印本を示す。
- 本に同じことを意味する。 記した。 従って書名欄の「同」は、特記なき場合巻数・著者事項も前出 巻数・著者事項は初出本を除き省略し、 前出本と異なる場合にのみ特
- 書名頭に冠した標号は、解題の標号に符合する。

14史記評林 一三〇巻補史記一巻首目一巻 裴賦集解 明万曆四(一五七六)年刊(呉興凌氏) 唐司馬貞索隠 唐張守節正義 漢司馬遷撰 明凌稚隆輯 劉宋

附読史総評

一巻

逓修

1* 1= 1^ 1 口 又 又 又 逓修

逓修

2ィ 同 清光緒一〇(一八八四) 年吳興凌氏刊逓修本 年刊 (湘郷劉氏) 翻明万暦四

3 同 2 p 又 〔明万暦〕刊

清光緒一七 (一八九一)

年修

(星沙養翮書斎)

4ィ 同 (内題「史記」) 朝鮮 〔粛宗頃〕 刊

4 ¤ 又 修

5ィ 同 附短長説二巻 暦 凌氏刊逓修本 刊(建陽 明李光縉増補 熊体忠・劉朝箴) () 明王世貞撰 覆明万暦四年吳興 明 万

5¤ 又 後印(宏遠堂熊氏)

修

6ィ 5= 5ハ 同 又 又 **逓修(種徳堂熊氏)**

某氏点 寛永一三 (一六三六) 助左衛門尉) 覆 [明万曆] 年刊 建陽熊体忠等刊種徳堂熊 (京誓願寺前 八尾

氏修本 〈八尾版初刻本〉

6小6日 又又 後印(京本能寺前 八尾助左衛門尉)

元文元(一七三六)年修(京

銭屋庄兵衛・林権兵衛)

7ィ 同 (中嶋道允) 点 寛文一二 (一六七二) 年一延宝二(一

六七四)年刊(京 八尾甚四郎友春) 〈八尾版再刻本〉

遊修

8ィ 7ハ 7ロ 同 又 又 天明六 (一七八六) 年刊 (京 八尾甚四郎友春) 覆寬

文一二至延宝二年刊本

8 p 又 寛政四(一七九二)年修(広華堂蔵板 大坂 松村九兵

衛・森田伝兵衛・高橋平助)

後印 (大坂 松村九兵衛·森田伝兵衛 伊藤七郎兵衛

(大坂 敦賀屋九兵衛等

(京 山中瑞錦堂丸屋善兵衛)

(大坂 秋田屋太右衛門等

(大阪 堺屋新兵衛等

(大阪 河内屋茂兵衛等)

明治 一三 (一八八〇) 年四月刊 (大阪

天明六年京八尾甚四郎友春刊本 〈八尾版三刻本〉 松邨九兵衛等)

> 10ィ9ロ 又 同九月印 (同)

同 奥田遊校 刊(東京 明治一二 (一八七九) 万青堂別所平七) <u>|</u> 五 覆天明六年京八尾甚四 (一八八二) 年

郎友春刊本

10¤ 又 明治二五 (一八九二) 年即 (修文館)

11_イ同 寛文一三 (一六七三) 年刊 (京 積徳堂) 〈紅屋版初刻

又

12ィ11ロ 同 明和七(一七七〇)年刊(京 世裕堂) 覆寬文一三年

積徳堂刊本 〈紅屋版再刻本〉

12㎡ 又 天明九 (一七八九) 年印 (大坂 柳原喜兵衛・ 松村·

衛・梅月市兵衛

12=12ハ 又 又 後印(大阪 河内屋喜兵衛等)

明治印(大坂 敦賀屋九兵衛等)

13ィ 同 田中篤実等校 版 東京玉山堂山城屋佐兵衛発行) 明治二 (一八六九) 年刊 (鶴牧修

後印 (同) 序文改修

13~13 p 又 又 後印 (修来館水野忠順蔵版 東京山城屋稲 田佐兵衛 発

14校訂 史記評林 大阪 浪華同盟書楼岡島真七等) 藤沢南岳校点 一三〇巻校訂史記評林補 明治一四 (三皇本紀) 一 (一八八一) 年刊

九兵

一)年刊(大阪 修道館) 鉛印 5両 大郷穆·伊地知〔恒庵〕(貞馨) 点 明治一四(一八八

6同 鈴木義宗点 明治一四(一八八一)年刊(東京印刷会社)

17標史記評林 有井進斎(範平)補標 明治一六(一八八三)——「神史記評林 有井進斎(範平)補標 明治一六(一八八三)——

一八(一八八五)年刊(東京 報告社) 鉛印

17又 明治一九 (一八八六) 年印 (東京 九春堂)

(一八八二)・一六(一八八三)年刊(東京 鳳文18同 明帰有光評点 清方苞増評 石川鴻斎等輯校 明治一五

訓点付 B一○冊 三)年六—一○月刊(東京 同盟出版書房) 鉛印19同 原存列伝七○巻(タハ層評林史記列伝)明治二六(一八九

文大系所収 (外層史記列伝) 類二冊 漢20同 原存巻六一—一三〇(外層史記列伝) 重野安繹校注 明

0

刊(上海 文瑞楼) 石印21百五十名家評註史記(即史記評林) 民国一二(一九二三)年

解題

述する。場合はその限りでなく、 冒頭より所蔵者を掲出し、該儲蔵本について記場合はその限りでなく、 冒頭より所蔵者を掲出し、該儲蔵本について記記す。 但し、知見現存本が僅少且つ書誌記述を直ちには一般化出来難い 前に標出各本の一般事項を述べ、 後に各所儲蔵本について特殊事項を

- も厳格ではない。 努めたが、実物対照が困難で先後の判別が付き難い場合が多く、 必ずしの 各所儲蔵本は、 原則として早印本より後印本へと排列記述することに
- 冊数下の()内は、所蔵者の函架番号を示す。

〇凌稚隆原輯本

(国立国会図書館蔵〉 四〇冊合二二冊(152)1年19万暦四(一五七六)年呉興凌氏原刊本

げて「五帝本紀第一」と題す。 並に「史記評林目録」(第二至五行に一格を低し「漢 凌稚隆輯校」、第二行低一格「三皇本紀唐司馬貞補並註」と題す) 用書目」を列載し、次に「補史記」(首は「補史記 記評林凡例」十八則(末に二格下げて凌氏自序が あり、尾に 集解叙」、張守節の「史記正議論例」「史記正義諡法解」 外題を墨書。首に「刻史記評林序」(「万暦四年丙子冬十二月朔 本文巻頭「史記評林巻之一 (隔六) 呉興凌稚隆輯校」、次行一格低 王侍読宣議郎守右清道率府長史張守節正義」と題す)が有る。 に「補史記序」、唐張守節の「史記正義序」、劉宋裴駰の「史記 帰安茅坤書」)、唐司馬貞の「史記索隠序」「史記索隠後序」並 三葉、五帝・夏・商・周・秦六国・漢国都地理図計三葉、「史 - 史記正義列国分野」、三皇五帝・夏・商・周・秦・漢譜系図計 「呉興後学凌稚隆識」と署す)、「史記評林姓氏」、「史記評林引 白棉紙印本。 司馬遷 香色表紙(二八·六×一九·六糎)、 著/宋 中 左右双辺(二四·三×一三·九 郎 曹参 右肩に目録 太史 軍

銭英 陶仲 張璈 守礼 仲大 林文 林志 林汝昻 邑沈玄易刊」(巻一首葉)等と鈔手名あり。 及び丁付、下象鼻に刻工名、各巻首葉には屢屢「長洲顧標写同 附刻。版心白口単黒魚尾、 注行七字、凌氏按語低一格行六字。正文には句点声点及び傍注 双行、行十九字、各巻首尾の諸家評論低三格小字双行。 何仲 徐光祖 孫洪 孫徐 高さ四・一糎の上層を含む)。有界十行、 (単字は略す)。刻工:王白才 王以徳 付汝光 汝光 余六 余世芳 余芳 余希 戴文 劉守 陶英 章右之 章国華 楊順之 葉三 趙応其 何祥 吳文泮 文泮 沈玄易 徐軒 劉礼 銭世傑 孫葉 鄭玄 陸本 徐朝 謝安 厳春 徐普 金応奎 孫陶 章華 袁宏 袁敏斈 (学) 鄧秦 上象鼻に「史記巻幾」、中縫に小題 傅機 (付机) 洪平 章樊之 唐文 趙其 顧本仁 鄧欽 倪世荣 劉 (刘)子春 劉文 劉 鄧漢 陳子文 彭天恩 沈如昇 何文甫 世荣 刻工鈔手名は次の 盧琢王 袁斈 子文 温志 沈龍 孫余 徐文台 文 何仲仁 仲 。上層標 陳云 顧修、 銭世英 注小字 張鳳 孫承 汝修

「史記刻本、自宋元迄今不下数十家。但近時見行者、杭本無索悉選録入」と輯録せる諸家評説の主たるものを明示し、また溪、陳石亭、茅見滄、田豫陽、帰震川数十家則又蒐羅而出之、伝者、何燕泉、王槐野、董潯陽、茅鹿門数家、若楊鉄崖、王守楊升庵史記題評、唐荊川史記批選、柯希斎史記考要、其抄録流凡例に「太史公史記批評、古今已刻者、惟倪文節史漢異同、

羣籍、 弊云」と拠れるところの底本が示さる。更に凡例末の凌氏自序 刊行にいたる経緯が記されている。 名之象、先大夫諱約言、伯兄名廸知。併書以志本始云」と成書 梓。肇於万曆甲戌、訖於今丙子冬 (略) 笈大方、益羅史家所珎秘者、彙之而裒然成帙矣。 兄稚哲、友人金子魯来自国門、獲所録諸名家批評総総焉。 隠述讃、 相仮貸無寧居焉。古歙汪氏、維揚張氏、咸称好事、遂各捐貲付 艶之、而雲間張玄超、持所纂発微者、造余廬而印証也。 に「隆自弱冠読先大夫史記抄、旦且夕焉而悵其未備也。 台汪本蒲田柯氏所校、 頗少差謬。 茲刻以宋本与汪本、字字詳 間有不合者、又以他善本参之、反覆讐校。庶免亥豕魚魯之 凡発明馬史者、輙標識於別額、積草青箱非一日矣。 白鹿本無正義、 陝西本欠封禅・河渠・平準三書。 金子魯名学會、 則為嗜古者、 張玄超

本帙は字画明晰なる早印本ではあるが、「史記研究的資料和本帙は字画明晰なる早印本ではあるが、「史記研究的資料和本帙は字画明晰なる早印本ではあるが、「史記研究的資料和本帙は字画明晰なる早印本ではあるが、「史記研究的資料和本帙は字画明晰なる早印本ではあるが、「史記研究的資料和工作。」

16体 附読史総評一巻

〈内閣文庫蔵〉 四○冊(☎23) 高野山釈迦文院本

錫人/高 蘭谿人」を剜去し二行に亘り「呉 錫人」を「王世貞字元美太倉人」に、第五葉表首行の「陸瑞家字信卿 **履翁字吉父三山人」に、第七行下段の空格の所に「林 駒字**徳頌 洪邁下の「金華人」を「鄱陽人」に、第六行の「呉鼎」を「黄 **棄表第八行呂祖謙下の「寿州人」を「金華人」に、同裏第二行** 裏第九行「劉知幾字子玄彭城人」を「林之奇字小顯侯官人」に、第二 次の如き入木改修の跡が認められる。 「史記評林姓氏」 第一葉 上諸名家字里無考者闕猶有不及載姓氏/者以所評僅得一二節故 伯宗京山人」を「薛應旂字仲常武進人」に、第九行の「尤 瑛字汝白無 下の「余姚人」を「太平人」に、 第四葉表第八行の「高) 岱亨 第五行の楊士奇下の「字以行」を「以字行」に、第九行の謝鐸 人」と、第三葉表第二行の王禕下の「莆田人」を「義烏人」に、 本書は刊行後漸次一部増補改訂されたようで、本帙に於ても 岱字伯宗京山人」と改め、もと第二・三行にあった「以 鼎字 銭塘人 尤 英字汝白無

落している。 「戴」字がみえるが、 本帙同個所には無く、 刻工名が少しく欠善尚、前掲国会図書館蔵本には、巻一一〇第一葉版心下象鼻に

1、逓修本

〈東京都立中央図書館蔵〉 三六冊(特師)

目次第は前掲内閣文庫蔵本に同じ。 糎)、外題は「史記評林幾」、目録外題があり共に韓人墨筆。序垣・白棉紙印本。 空押行成紋香色朝鮮表紙(二七・九×一八・三

する(前掲早出印本は一至六)。また史記評林姓氏第一葉表第図十八図九葉を増補し、次の地理図と合せて丁付を一至十五と杞・衛・宋・晋・楚・越・鄭・趙・魏・韓・田斉の諸世家譜系首の譜系図の漢世系図後に呉・斉・魯・燕・蔡・曹・陳・本逓修本には更に次の如き増補訂正の跡が認められる。

禕・何喬新の計七家の評文が新増され、 會鞏・范祖禹・王応麟・馬端臨・劉因、黄佐と王維楨の間に王 等の補訂がなされ、また、読史総評の黄履翁と馬子才との間に し、同裏第六行下段汪道崑下「字玉卿」を「字伯玉」と改める 陽人」とし、第一〇行下段胡纉宗下「字学思」を「字孝思」と 第二葉表第三行下段の「鄭(玉」を削除、第六行上段舒雅下 第三行 (唐の項) 「孫 の所に「鮑 彪 を削去し、第二葉表第一行下段(宋の項)の葛洪を削去してそ 二・三行原刻「魏/ に「又曰」二条が増補され、計十八丁で三葉を増している。 訂正、第四葉表第七行下段林希元下「字茂員」を「字茂貞」と 「字国賢」と訂正、同裏第四行上段李夢陽下「開封人」を「慶 人」と補訂し、第三葉表第一〇行下段邵宝下の「字君賢」を - 廬陵人」を「廬州人」 と改め、第八行下段呉師道下に「東陽 洪字容父東陽人」とし第六行下段(南北朝の項)の「鮑 **密雲人」と刻入訂正されている。** 樵」を削除し「劉知幾字子玄彰城人」とし、 陸 機字士衡呉興人」とあったのを「晋/ 末の王世貞の評説の後 第一葉裏 彪

1-逓修本

〇冊、第一二・三〇・三一冊を欠く) 〈尊経閣文庫蔵〉 欠巻二五―二七、九一―九八 三七冊(原四

掲内閣文庫本に同じ。順序次第は「補史記」を目録の次、巻一直前に配するほかは前順序次第は「補史記」を目録の次、巻一直前に配するほかは前を刷印せる双辺の刷題簽があるが原題簽ではあるまい。首目の白棉紙印本。後補濃縹色表紙(二六・九×一七糎)、書名のみ

更に次の如き増補がなされている。

の評二文が加えられている。人」の四名を追刻し、「読史総評」末の王世貞評文の次に陳文燭中崑山人/李攀龍字于鱗斎南人(陳文燭字伯玉沔陽人/劉(鳳字子威長州中崑山人/李攀龍字于鱗斎南人(陳文燭字伯玉沔陽人/劉(鳳字子威長州

さらに「短長説」二巻が補写されている。

、凡例末には李氏題識が、「読史総評」末には盧舜治の評文、が、別の末には李氏題識が、「読史総評」末には盧舜治の評文、が欄脚には墨筆で校合等の書入がなされ、朱の標注がある。上び欄脚には墨筆で校合等の書入がなされ、朱の標注がある。上で横口には金巻に亘り、正文及び三注には朱句点朱引、墨筆(まれはぼ全巻に亘り、正文及び三注には朱句点朱引、墨筆(まれ

/民一〉 整字林戀識/ (印) (印) 〈印文「林氏/戆」「物子孟夏 整字林戀識/ (印) (印) 〈印文「林氏/戆」「物料我家青氈為/大家之珍物即書一語以/遺後証也/貞享甲写/訓点朱句其後使我見之/数遍校正与家本不差一/字豈史記合部百三十巻我家/旧点本幸存/加賀羽林菅公曾借之巻末に次の貞享元(一六八四)年林鳳岡の手識がある。

・金沢学校」(朱長方)、「学」(朱円)の印記あり。

1ポ逓修本

義諡法解を引用書目と読史総評の間に配する等少しく順次の乱王世貞叙は茅坤序の次に、補史記を正義序、集解敍の間に、正茶色表紙(二六・九×一七糎)。序次、首に徐仲行序を冠し、

れがある。

(朱方)、「如/峩」(朱方)の印記あり。 蔵」(白方)、「投戈/講藝/息馬/論道」(白方)、「沢/関」字を失刻或は削除する等の粗漏が目に付く。「青田/徐則/恂一〇、一一三―一二〇の巻頭大題下の「呉興凌稚隆輯校」の七一の、一一三―一二〇の巻頭大題下の「呉興凌稚隆輯校」の七原刻葉の漫漶が進み、甚しい個処は覆刻による補刻がなされ

、国立国会図書館蔵〉 四○冊(222.03-R74S)2ィ清光緒一○(一八八四)年湘郷劉氏刊本

字を左寄りに(巻六六等)、 或は大字(巻一七等)に刻し、 時 第一冊、以下「史記評林目録」までを第二冊に収め、 文には句点声点旁注の附刻あるも誤脱を免れず。版心白口双黒 字双行行廿一字、上層標注行六字、凌氏按語低一格行五字。正 に字無き巻(巻六二等)もある。四周双辺(一六・二×一〇・六 本紀第一」と題す。尾題は大概「史記評林巻之幾終」、或は「終」 の前に配することのほかは上掲内閣文庫蔵本に同じ。 は「史記評林凡例」を「史記評林引用書目」の次、「読史総評」 がある。首目は首二冊に亘り、王世貞敍より国都地理図までを 緒甲申重刊/史記評林/ |湘郷瑞芸氏劉鴻年校於/耕雲読月之室||伝||| と双行木記| ·史記評林巻之一 (廢²) 呉興凌稚隆輯校」、第二行低一格「五帝 淡茶色表紙(二四・三×一五・七糎)、外題無し。 高さ三・五糎の上層を含む)、有界、十行、行廿一字、注小 佩蘭堂蔵板」と題され、 書扉に「光 その裏に 本文巻頭 順序次第

魚尾、「史記巻幾 (小題) (丁付)」。

/周印』(白方)の印記あり。 (追記2)で、茅坤序首一葉等一部覆刻補修葉を混える修本である。「尹基とあるが、前記清光緒一○年湘郷劉氏刊本とは明らかに同版本帙は、木記に「光緒辛夘(一七年)秋仲星沙養翩書斎重刊」

3 〔明万曆〕刊本

〈内閣文庫蔵〉 三一冊(84) 紅葉山文庫本

字数、序目部分には「由八刊」、「葉才写」と刻工鈔手名あり。 声点附刻。版心白口双黒魚尾「史記 (小題幾) (丁付)」、巻一 四・二糎、高さ二・五糎の上層を含む)、有界、十一行廿四字、 輯校者名は無い。或は小題を上にし下に大題を、「史記幾」又は 博士弘文学士河内司馬貞補撰并註」と題し、「補史記」の大題 の印記あり。 注小字双行行廿四字、上層標注行五字或は四字。正文には句点 記評林巻之一」、次行低一格「五帝本紀第一」とのみ題署され 並に輯校者名の題署なし)を配す(以上第二冊)。本文巻頭「史 図・国都地理図、「史記正義論例諡法解」(列国分野を含む)、 書目」、「史記評林姓氏」、「史記評林目録」(以上第一冊)、譜系 序目は、王世貞叙、茅坤序、徐中行序(以上三序は前掲原刻修 幾」。第二七冊(巻一○九─一一二)を除き裏打補修がなさる。 本の覆刻)、「史記集解序」、「史記索隠序」、「史記索隠後序」、 「史記評林巻之幾」と題する巻も多い。四周双辺(二三・七×一 「読史総評」と続き最後に「三皇本紀」(第二行低二格「唐国子 一〇以後は版心体式一定せず、単黒魚尾を混ず。下象鼻にまま 「補史記序」、「史記正義序」、「史記評林凡例」、「史記評林引用 新補茶色表紙(二六・九×一五・七糎)、書題簽「史記評林 ·秘閣/図書/之章」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)

く、極めて粗笨なる翻刻本である。水沢博士は異刻本として取本版は集解索隠正義三注並に各巻首末の評文の 冊削 が甚し

万暦三年南京国子監刊本に拠るものとされた。り上げ、史記諸版本との校合の結果をふまえ正文及び三注は明

4イ朝鮮刊本

「史記巻之幾(丁付)」。 首に、徐中行・茅坤・王世貞の三序(茅序は前掲諸本と異な 首に、徐中行・茅坤・王世貞の三序(茅序は前掲諸本と異な 「史記巻之幾(丁付)」。

及はなされていない。

なお、水沢論文には本版についての言
で文及び三注並に巻首巻尾の評文は前掲〔万暦〕刊本(3)に
すべて省かれ、史記評林の体例とは甚だ相違している。但し、
き末の総説の類のみを残し、原本上層の標注及び行間の旁注は
は「史記」とのみあり「評林」の二字は無い。諸家評説も巻首
及はなされていない。

朝鮮版史記評林には他に顕宗実録字活字版があるが寡聞にし

著録の一本(欠巻七七一八二、 粛宗一五(一六八九)年頃刊と推定している。本版の欵式は、 て本邦儲蔵するところを聞かず未見である。誠庵文庫典籍目録 様も顕宗実録字の風を帯び恐らくはその覆刻本であろうか。 毎半葉十行十九字であるという此の銅活字版にほぼ同じで、 九)年七月一一日の内賜記があり、同目はその年を刊年に繋げ 四〇冊)には康熙二八(一六八 字

〈静嘉堂文庫蔵〉 三三冊 92 16

四冊 三十二)」と書名及び右肩に目録外題を墨書。 巻八第三七・三 八の両葉を欠き、補鈔を予定して十行罫紙二葉が補綴さる。 〈国立国会図書館蔵〉 三三冊(222. 03-Si 229Rs-R (s)) 第二 空押卍繋橙色表紙(三○・四×一九・六糎)、「史記目録 (巻八一一八六)、同版零本を以って補配 \bigcap

+二」と書名及び右肩に目録外題が墨書さる。ごくまれに墨筆 方)、「華/ 伯」(朱方)、「鄭氏/仁邦」(白方)の印記あり。 方)、「眠山/樵隠」(朱方)の印記、第二四冊には「東萊」(朱 五/甫印」(朱方)、「李氏/章鉉」(朱方)、「宣城/人 」(朱 標注書入あり。 巻一首眉上に墨筆で 「買得於松禾宅」と。「惇 〈宮内庁書陵部蔵〉 空押卍繋橙色表紙 (三五・六×二一・六糎)、「史記総目(1-三 三三冊 303

+□」と書名及び右肩に目録外題が墨書さる。 空押卍繁橙色表紙 (三五·五×二一·七糎)、 「史記目録(1-三

〈岩瀬文庫蔵〉 三三冊 111 35

空押卍繁橙色表紙(三○・八×二○・五糎)、「史記評林目録(幾)」

24 13 四 | 11 12 31 63 64 75 23 24 七 17 18 二 | 12 15 16、三 | 13 14、四 に誤綴され、巻一の第一九・二○の両葉は欠葉)、一―29~32、 史総評─1920(但し、此の二葉の原刻葉は巻一第一九・二○葉 三―112、一二八―78、以上の補刻葉は字様版式等一様でな 18、一七-56212234、一二〇-78、二二一-56、 七一78、 2、三八-34、三九-6313、四-12~14、四三-131423 91043~45、二九—56、三○—518、三二—616、三七—1 2122、二四-356、二六-1516、二七-84142、二八-12 3 212 22 33 35 55 668、一五一3 4 37 38、一六—19 20 32 4、一七— 29 30 37 38, — O — 11 12 19 20, — 三 — 15 16, — 三 — 11, 17、二—11、四—39、五—127828、六—4534、八—910 結びアラビア数字で丁数を示す)。徐序1、茅序2、目13413 が尠くない。次の各葉は補刻であろう(漢数字で巻数を、 4、一〇二-5~8、一〇六-9、一〇九-56、一二〇-17 七-78、八九-112、九二-56、九五-12、 11 12 19 20 29 30、一八 24 39 40 63 64、二〇 15 16 21 ~ 24、二一 1 徐序末二葉を茅序末に誤綴。原刻葉の漫漶甚しく、補修補写葉 と書名及び右肩に目録外題を墨書。茅序の末二葉を徐序末に、 五五—910、 或は逓次に補修されたものか。次の各葉は補写である。読 四五—34、 七九—15 16 21 22、 九—15、 五九-7、六七-112、七五-7~9、 四六-910、四七-92127~3033、 一五-13143123940、一六-125~8 -9 ~ 12 25 26 35 36、六 -1 ~ 4 19 20 八一一3~5、 八六—56、 九六-11 一 四 1 2 四八一 ーで 七

27 28 5, 34、一九-12、一二-910、一二三-129101920、 七三-34、七五-10、七六-12910、七七-56、七九-9 六九-19~22、七〇-91015162122、七一-78、七二-34、 121718、四八─1278、五○─4、五五─561112、五六─ 7 8 19 20 23 24 29 30 〇六-7815、一〇八-34、 三九—17 三三—56212、三四—34、三七—56、三八—1256、 $\frac{1}{2}$ 一二六—13~16、一二八—234、一二九—56910、一三〇— 一 七 13 九五-34、九七-1314、九九-11、一〇五-910230、一 八一-6、八二-12、八三-34、八五-12、九二-13 二 | 1 2 13 144 377 38、二 二 | 9 10 27、二 三 | 1 2、二 五九-3410、六〇-15、六二-1256、六四-12、 四二-34910、四三-2728、四四-1256、 41 18 21 22 41 50 21 22 25 26 \(\sum_{13} \)
13 \(\frac{1}{4}\)
\(\sum_{-13} \)
16 \(\frac{1}{4}\) 二六-9~11、二七-278、二八-17 四〇-1256234、四一-34781113 八 25 26 31 32 43 46 一〇九一3411、一一〇一23~ 59 60 65 66 四七一 $\frac{-}{0}$ 四 18 21

〇李光縉増補本

茅・徐二序末の題署程式は上述諸本と異なり、茅序は「万暦丙計一二葉、末葉表終行に「序畢」、版心に「史記序」と題さる)。首に王世貞・茅坤・徐中行の三序を冠す(丁付は三序通しで54〔明万曆〕刊覆明万曆四年呉興凌氏刊逓修本

之吉日 双行、 無し。 題下、 子年季冬月朔日帰安茅 じであり、底本の刻工名の一部をそのまま覆刻したものであ 版心白口単黒魚尾、「史記巻幾 者の題署はない。また巻二二は輯校者・増輯者両名ともに題署 行低一格に「五帝本紀第一」と題す。只、巻二〇及び二一は大 接続する。本文巻頭、「史記評林巻之一 (廃五) 呉興凌椎隆輯校」、 巻首に「上」字無し)を附し、次に「史記評林目録」「補史記 史総評」の次に「短長説」二巻 る序次は前記内閣文庫蔵原刻修本に同じで、 行撰」と題署さる。以下「史記索隠序」より「読史総評」に至 る。史記正義序の末葉裏尾題前に、「建陽後学雲浜熊体 工名あり。但し、この刻工名は姓名・刻入個所並に原刻本に同 は一格を低し行六字。正文には句点声点及び傍注が付刻さる。 九糎、高さ四糎の上層を含む)、有界十行、 なる刊記を有す。 一巻(首、「補史記〈格〉温陵李光縉増補」と題す) 「呉興凌稚隆輯校」と輯校者名のみ大字で刻され、 尾題は「史記評林巻之幾※」と。四周単辺(二四×一三・ 行十九字、眉上標注行七字、凌氏按語及び李光縉増評 /賜進士出身中奉大夫江西布政使司右布政/使天目徐中 坤書」 (首、「附 ۲, (小題) (丁付)」、下象鼻にまま刻 行十九字、注小字 「万暦丁丑歳仲秋 短長説 本版には更に「読 があり本文に (下)、上

鳳洲・龍湾・九我・了凡・如崗諸名公言、眎凌評倍之、毎段冠聞徐龍湾叙史評。以凌不及録其評為恨。余用是捃摭葵陽老師及「温陵後学李光縉識」と題す)があり増輯の顚末を述べ「顧又首の「史記評林凡例」末、凌稚隆序に直接し李光縉自序(尾、

総評」末に盧舜治の評文を増補する。 総評」末に盧舜治の評文を増補する。 総評」末に盧舜治の評文を増補」・「焦氏筆乗」を、「読史 別四部稿」・「李滄溟集」・「焦氏類林」・「焦氏筆乗」を、「読惠 として呉国倫・徐中行・黄洪憲・盧舜治・屠隆・袁黄・李廷機、 支陽は黄洪憲、鳳洲は王世貞、龍湾は徐中行、九我は李廷機、 英陽は黄洪憲、鳳洲は王世貞、龍湾は徐中行、九我は李廷機、 英陽は黄洪憲、鳳洲は王世貞、龍湾は徐中行、九我は李廷機、 英陽は黄洪憲、鳳洲は王世貞、龍湾は徐中行、九我は李廷機、 大村の。「史記評林姓氏」末に「増補」 大村の部稿」・「李滄溟集」・「焦氏類林」・「焦氏筆乗」を、「読史 として呉国倫・徐中行・黄洪憲・盧舜治・屠隆・袁黄・李廷機、 大村の部稿」・「李滄溟集」・「焦氏類林」・「焦氏筆乗」を、「読史 として呉国倫・徐中行・黄洪憲・盧舜治・屠隆・袁黄・李廷機、 大村の部稿」・「李滄溟集」・「焦氏類林」・「焦氏筆乗」を、「読史 といて呉国倫・徐中行・黄洪憲・盧舜治・屠隆・袁黄・李廷機、 大村の部稿」・「李滄溟集」・「生の神で、九段は李廷機、

を「光縉曰」の三字を冠し一格を低げ行六字で標示する。本で、本文及び注文の行格は同じく字様も近似する。また、ま見える刻工名も底本に一致し、上欄の標注は李光縉の増補部のを除けば、内容刻入個所ともに前刻と同じである。李光縉の学を院けば、内容刻入個所ともに前刻と同じである。李光縉のオール、高祖本紀等の巻末にも見える。内容は歴代諸家の所説に亘るが明人の評説が最も多い。また上層には李光縉の増補部本版は、前記明万暦四年呉興凌氏刊逓修本(11)の覆刻増輯本版は、前記明万暦四年呉興凌氏刊逓修本(11)の覆刻増輯

九、清乾隆二八序刊清黄任等編泉州府志巻四四に伝がある。杜詩解等がある。清康熙二三年序刊清金鋐等編 福 建 通志 巻 三要旨、四書臆説、易経潜解、読史偶見、南華膚解、蘇文抄評、

—三六、七二、七四—七八、九七、一〇一

得る。 管窺の及ぶところ此の配本が最も早印とみとめ配部分である。管窺の及ぶところ此の配本が最も早印とみとめず 前記 (エ゙ン)、明万暦四年呉興凌氏刊逓修本六四冊(エイア3) の補 史

見在する。 本版の初印完本は未だ管見に入らず、以下の後印・後修本が

5 宏遠堂熊氏印本

四冊(ng C-3) 鈴木豹軒手沢本(京都大学文学部蔵) 有配鈔 天保一二年・弘化二年校本 二

印行者と看做す可きか判断し難いが、次述の修本の現存するこ記と此の木記及び封面の「陳耀吾重刻」との何れを刊行者或は遠堂熊氏/増補繡梓行」と双辺両行木記を有す。正義序後の刊評林/李觧元補 陳耀吾重刻」と。最終尾題後五行を隔て「宏書され、右に目録外題が書さる。封面があり「凌太史輯/史記書を表紙(二七・六×一七・二糎)、外題は「史記評林」と墨

保丑二月廿八日校了 (巻六末)

保丑三月朔校了 (巻一〇末)

弘巳仲春十一日 (巻三七末)

弘巳二月十二日 (巻四〇末)

(朱長方)、「豹軒/図書」(朱方)の印記あり。年か。「張州木家/図書之記」(朱長方)、「岸氏家/蔵図書」保丑は天保一二(一八四一)年、弘巳は弘化二(一八四五)

5/修本

巻七〇第一九・二〇葉等補刻あり。

校」と題さる)は凌氏原刻の版板を襲用し、漫漶が著るしい。 校者名の題署なし)、巻一二七至一三〇(巻頭、「呉興凌稚隆輯 一七十一三〇配明万曆四年呉興凌氏刊逓修本 二〇冊(紹印) 二七十一三〇配明万曆四年呉興凌氏刊逓修本 二〇冊(紹印) 本色表紙(二六・九×一六・五糎)、書題簽「史記首巻(本紀・ 二七十一三〇配明万曆四年呉興凌氏刊逓修本 二〇冊(紹印)

〈内閣文庫蔵〉 二四冊(231)(年利/義恭」(白方)、「光源」(朱長方)の印記あり。

入が多く、次の本奥書を有す。 等の書入がなされ、ほぼ二手を認め得る。一は、江戸前期のもに亘り朱句点朱引墨訓点、音義訓釈校語、或は諸書よりの引抄に亘り朱句点朱引墨訓点、音義訓釈校語、或は諸書よりの引抄

惠山人仙也五十齢判(巻二末) 恵山人仙也五十齢判(巻二末) 恵山人仙也五十齢判(巻二末) 恵山人仙也五十齢判(巻二末) 東山継天西堂仮 其/師幻雲老翁所秘之本朱句倭 技一覧則朱点也/倭点也先輩加焉雖然有餘不足以為根而已 技一覧則朱点也/倭点也先輩加焉雖然有餘不足以為根而已 大存亦如是於没亦如是呼/天文八載己亥昏春二十五日 善 大方亦如是於没亦如是呼/天文八載己亥昏春二十五日 善 大方亦如是於没亦如是呼/天文八載己亥昏春二十五日 善 大方亦如是於没亦如是呼/天文八載己亥昏春二十五日 善 大方亦如是於没亦如是呼/天文八載己亥昏春二十五日 善 大方亦如是於没亦如是呼/天文八載己亥昏春二十五日 善 大方亦如是於及亦如是呼/天文八載之亥昏春二十五日 善 大方亦如是於及亦如是呼/天文八載之亥昏春二十五日 善 大方亦如是於及亦如是呼/天文八載之亥昏春二十五日 善 大方亦如是於及亦如是呼/天文八載之亥昏春二十五日 善 大方亦如是一次。 大方亦有於一次。 大方亦亦。 大方亦亦。 大方亦如是一次。 大方亦如是一次。 大方亦。 大方亦。

天文八己亥首夏之十賞於善慧東軒下朱句倭点畢其功云人

瓢闍山人五十載判(巻一〇末)

本云天文八己亥夏五之十又四於善恵境中朱句墨点等考之之蓂二日也/善恵瓢闍山人半百龄(巻三八末)五本云此一帙自第一至第八朱句墨点考正者乃天文八己亥夏五

点而已 瓢也五十九(巻一○九末) 人五十二齢/同十七稔戊申九月念一以一韓所点之本重加倭天文十辛丑孟夏二十又一於栗之東窓下首書等記焉 瓢庵山瓢山人五十齢(巻四七末)

本宝天文十稔辛丑夏五之念八於栗棘書院記焉 瓢山人五十

二齡/同同十七戊申九月念八加一韓師之倭点了 九 (巻一一八末) 仙也五十

*\||右一帙天文十辛丑六月七**蓂**於栗之東白軒下記 焉 人五十二載/同天文十七戊申小春四加一韓師之点而已 瓢山 瓢

奥者也 本云亀策伝虽如旧本加点未通義理待精史学之人以可 究 其 深

也五十九 (巻一二六末)

本云天文十辛丑六月十一於栗之東白軒下記焉 二齢/天文十七戊申小春初七加一韓師之倭点 **鳳山人五十** 仙也五十九

因循経年閱月而已莫訝~/于時天文十辛丑六月十四賞 瓢 本云此書百三十巻首書并句点以幻雲師之秘本鈔之記之予比年 閣山人五十二齢判/天文十七戊申小春初旬以一韓師之本重 而加倭点太半塗朱而已/ 仙也五十九(巻一三〇末) 、或守栗棘之祖塔或領恵日之住持或為栗赴登州之行繇此/

何焯、竹書紀年等諸家諸説の引抄、或は校語を交えるもので、 住々「彦博按」、「博按」と標記され、猪飼敬所自筆かと思われ (刺客列伝)等主として欄上にみられる朱墨の書入で、銭大昕、 (天官書)、六三 (老荘申韓列伝)、六七 (仲尼弟子列伝)、八六 /政府/図書」(朱方)の印記あり。 敬所には太史公律暦天官三書管窺三巻の著がある。「日本 は、巻六(始皇本紀)、二五(律書)、二六(暦書)、 . 二七

5=種徳堂熊氏逓修本

巻六六第一一・一二葉補刻。「帰安凌以棟先生輯 、史記評林

> なる封面があり、右下方に「本衙蔵板/翻刻必究」の双辺長方 朱印が鈐さる。巻末の木記の「宏遠」二字を「種徳」と控改し 種徳堂熊氏/増補纐梓行」と。 書林熊沖宇家友于梓」(上辺外に「原本重刊」と横書)

栗皮表紙(二六·五×一五·九糎)、新補書題簽「史記評林〈大阪大学附属図書館蔵〉 三二冊(ハュミロff) 岡田文庫

入あり。 一(一三二)」。一部に朱引、朱句点、墨筆の返点送仮名等の書 第二

耕斎/之家蔵」(朱長方、 第二冊のみ)の印記あり。 第二冊見 外題「史記評林 一(―三十)」、右肩に目録外題が墨書さる。 六〇巻 九冊 (30シ27) 返右下方に藍筆で「此冊係林読耕斎旧蔵/北山田 方)、「吉田/鋭雒/蔵書」(朱方)、「北山/文庫」(朱方)、「読 朱点朱引、眉上に朱標注書入あり。「黙庵/所蔵/之印」(朱 〈九州大学中央図書館蔵〉 第二冊配本は白棉紙印本。黄色表紙(二七×一五・四糎)、 欠王世貞序・目録・補史記一巻並首 識」と。

例一(十三―廿止)」、 目録外題墨書。 朱引朱句点の書入あり。 無文庫」(朱長方)の印記あり。 を欠く。香色表紙(二五・九×一六・二糎)、書外題「史記 序凡 ·成沢/氏 /蔵書」(朱方)、「寺尾/寿/所蔵」(朱方)、「音 外題下の冊次数を勘案するに原二〇冊、その内第二至一二冊

〈宮内庁書陵部蔵〉 二五冊 (268 29)

賢閣/図書記」(朱長方)、「帝室/図書」(朱方)の印記あり。録外題のみを墨書。封面なし。一部朱引朱句点の書入あり。「養茶色表紙(二五・八×一五・三糎)、 外題は大題無く右肩に目

覆〔明万曆〕刊種徳堂熊氏修本 〈八尾版初刻本〉67寬永一三(一六三六)年京誓願寺前八尾助左衛門尉刊

数が刻され、最終冊は「一百二十九之三十終」とある。 目録」、第二冊に「巻読史総評」、第三冊以下「一之二」等と巻 本紀第一」と題す。 四周双辺(二二・九×一三・五糎、 高さ三・ は「史記評林巻之一 (格立) 温陵季光霜増補」、第二行低一格「五帝 に同じく、本文巻頭、 内容は底本である前記、 送仮名振仮名及び旁注が、三注には縦点返点送 仮名 が 付刻 さ 氏増評には墨囲の「増」字を冠す。正文には句点声点縦点返点 十九字、上層標注行七字、凌・李両氏按語は低一格行六字。 九糎の上層を含む)、無界、十行、行十九字、 注小字双行、 版心に近く「種徳堂熊氏/増補繡梓行」の原木記が刻され、 名・字数が刻さる。巻末本文は最終葉表第三行で終り、その後 心白口単黒魚尾「史記巻幾 及び標注並に巻首巻尾の諸家評説には加点無し。また巻一五至 二二は正文の句点声点のみで、 唐本仕立。原題簽は「史記評林 但し、首の「史記集解叙」を除く序目、読史総評、短長説 一行に尾題があり、 行格欵式等並に底本の程式を襲う。巻頭 〔明万曆〕刊種徳堂熊氏逓修本(5) その後に (小題) (丁付)」、下象鼻に刻工 返点送仮名等の付刻はない。 幾」、題下には第一冊に「序 「于時寛永十三千年/ 序目の 李 版

> (三格) 開板」なる刊記を有す。 九月上旬/ 洛陽三条寺町誓願寺前/ (柢^) 八尾助左衛門尉)

詳。只、後代俗に悪点本と言われた(正斎書籍考巻三)。巻二三第五葉版心中縫に「正義点」とみえるが、点校者名不

である。
本版は爾後簇出せる和刻本の嚆矢であり、後出諸版の範式を不ある。
本版は爾後簇出せる和刻本の嚆矢であり、後出諸版の範式を本版は爾後簇出せる和刻本の嚆矢であり、後出諸版の範式を

〈神宮文庫蔵〉 五〇冊(五乙二い間)

自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「京崎/文庫」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。「宮崎/文庫」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。「宮崎/文庫」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。「宮崎/文庫」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。「宮崎/文庫」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。「宮崎/文庫」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。「宮崎/文庫」(朱方)、「満井泰治氏ノ寄附金ヲ/以テ購入セル文学博士/狩野友庫、東皮表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。首の序目、王世貞叙より「史記自色表紙(二八×一七糎)。

本 二七冊(ધりん) 七配明和七年世裕堂刊本、巻三一―三八配寛文一三年積徳堂刊〇、九一―九九配寛文一二―延宝二年八尾甚四郎友春刊本、巻

新色表紙(二六・六×一六・九糎)、題簽欠落。目録は集解叙4年表紙(二六・六×一六・九糎)、題簽欠落。目録は集解叙知色表紙(二六・六×一六・九糎)、題簽欠落。目録は集解叙述の表紙(二六・六×一六・九糎)、

6º後印本

初印本に同じ。 巻末の刊記第三行の「誓願寺」を「本能寺」と控改。題簽は

〈斯道文庫蔵〉 五〇冊(25-3)

記あり。 筆で訓点が訂正されている。「山本/蔵書/之印」(朱方)の印 点朱引、眉上行間等に朱墨の校字等の書入があり、墨筆或は朱 が墨書さる。目録は首冊末の引用書目の次に配さる。処々朱句 空押斜格子瑞鳥雷紋香色表紙(二八×一七・五糎)、目録外題

〈同蔵〉 欠巻一―四 四八冊(25-2) 安井文庫

〈無窮会蔵〉 五〇冊(真軒ધ))

香色表紙(二八×一八·二糎)、

目録外題を墨書。

「無窮会/神習文庫」(朱長方)の印記あり。書入、一部朱句点朱引の書入あり。「真軒/蔵書」(朱長方)、茶色艶出表紙(二七・九×一七・六糎)。 眉上に朱の校語等の

〈同蔵〉 五○冊(織田335)

方)の印記あり。 方)、「織田/氏図/書記」(朱方)、「無窮会/神習文庫」(朱長句点朱引の書入あり。「勿来/菴蔵」(朱不整円)、「景/臨」(白、朱色艶出表紙(二八・八×一八・五糎)、 目録外題を墨書。 朱

〈内閣文庫蔵〉 五○冊(№5)

の印記あり。 「大学校/図書/之印」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)(朱方)、「秘閣/図書/之章」(朱方)、「紅葉山本」(朱長方)、香色艶出表紙(二七・七×一七・七糎)。 「秘閣図/書之章」

〈神宮文庫蔵〉 五〇冊(五乙二い181)

の印記あり。 薄茶色艶出表紙(二七・四×一七・四糎)目録外題が墨書さる。 薄茶色艶出表紙(二七・四×一七・四糎)目録外題が墨書さる。 一は大三、「価村氏」(自方)、「寄納」、「神宮」、「精村正璟」がある。「□曲」在六」(自方)、「寄納」、神宮文庫」、橋村正璟」がある。「□曲」在六」(自方)、「寄納」、神宮文庫」、橋村正璟」がある。「□曲」在六」(自方)、「寄納」、神宮)、行間・欄外余自がある。「□曲」を表際序との間に配す(以下の後出印本はおおいます。

十/大尾」と刻さる。第一冊は「序目」、第二冊は「読史総評」、末冊は「百廿九之三第一冊は「序目」、第二冊は「読史総評」、末冊は「百廿九之三第一次の無窮会及び京都大学儲蔵本は題簽が改刻され、書名下に

〈無窮会蔵〉 五○冊(天淵段)

書入あり。末に朱筆で「維時昭和十九年十二月二十六日一読了薄茶色艶出表紙(二六・八×一七・五糎)。一部朱句点朱引の

記あり。 加藤虎之亮識」と読書識語がある。「知我/者誰」(白方) の印

〈京都大学附属図書館蔵〉 五〇冊 5-42 シ1 貴 皆川淇園自筆書

義、按語等、主として朱筆(青墨を交える)の書入がなされ、 には朱筆で加点さる。欄上及び上層或は行間余白に、校語、 処々訓点を訂正し、首序の原三序、正義序、凡例等無点の個所 及び短長説は末冊に配す。全帙に亘り、朱引朱句点が施され、 園には遷史戻柁三巻、太史公助字法二巻の著がある。 等に尚書正義より抄録せる墨筆の書入があるが或は別筆か。淇 するところあり。巻二夏本紀・巻三殷本紀・巻三四燕召公世家 伝・巻一二九貨殖列伝等に周密で、まま「愿按」の二字を標記 伝・巻六二管晏列伝・巻一〇五扁鵲倉公列伝・巻一二二酷吏列 殊に巻二三礼書・巻二四楽書・巻三〇平準書・巻六一伯夷列 墨書さる。 香色艶出表紙(二七・二×一七・七糎)、右上方に目録外題が 目録は索隠序と同後序との間に誤綴され、 読史総評 語

五〇冊 (古2211) 伊藤東涯・東所・ 東峯

さる。朱墨青で圏点、眉上に校語、字傍に音義等の書入があ 日会読了韶」と東所の読書識語がある。 八日会読全業矣韶」と、 薄茶色艶出表紙(二七・五×一七・五糎)。題簽は再度改刻さ 訓点を訂正す。 書名下の巻次数が無く、「序/目録」、「一之二」等と墨書 末の原木記直前に墨筆で「寛政壬子四月廿 また短長説末に朱筆で「壬子五月十一

6元文元 (一七三六) 年修本

林 (飛白体)/ 伝の別及び巻数が刻さる。 第一冊に「史記評林 序目 し、元文元年、 史記正義論例と諡法解との間にある。 「読史総評 坤」、第三冊以下「帝紀」之三」等と紀・世家・表・書 本版は後年、京都書肆林権兵衛・銭屋庄兵衛両名の蔵板に帰 皇都 訓点を削り白文本として印行された。 書肆(書肆名未刻)」と題す。 封面、「帰安凌以棟先生輯) 乾」と題し、書名下方、 題簽は、 第二冊は / 史記評 目録は

去し、刊記の第一行は原刻のままであるが第二行以下を削り、 寛永原刻本の返点送仮名及び巻末の種徳堂熊氏の原木記を删

「元文元年辰九月改

皇都書林 銀川通綾小路下ル町間町通御池上ル町

と入木改刻されている。

〈大阪大学附属図書館蔵〉 三〇冊(101-史S)懐 9352、欠巻一―三、一九―二一)があるが未見。 部のみ。佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録著録本二四冊(鍋 記雕題書入本 本後修無点本は見存尠く、 管見に入ったのは次の懐徳堂本一 三村崑山手鈔史 (追記3)

は訓点の書入がある。「有不/為斎」(朱方)の印記あり。 欄脚或は附箋に師中井履軒の史記雕題が移写され、本文行間に 茶色表紙(二六·六×一八糎)。書入は三村崑山手鈔で、 欄上

と改元)寛政元年の間に、京都林権兵衛・銭屋庄 兵衛 両名よ 本版の板木株は天明九(一七八九)年(正月二五日寛政元年

等四軒より八尾板支配人である敦賀屋九兵衛・井筒屋伝兵衛両 求板したことが明瞭であるが、寛政四年以後慶應元年までの 平野屋半右衛門等が仲介に入り、行司計らい双方合意事件落着 等が類板として差構えの態度に出たため、当時の大坂書林行司 兵衛)へ永代売渡している。此間の経緯は、奈良屋等が史記評 弐枚であった。さらに寛政四(一七九二)年正月には、奈良屋 大坂秋田屋太右衛門が、京都丸屋善兵衛支配浅井伊予助蔵板を 板木五点の内に史記評林古板無点焼株が見え、 秋田屋太右衛門宛ての「永代売渡申板木之事」が記され、売渡 八年三月)及び京都上組重板類板出入済帳(宗政五十緒 詳細に記されてある。また京江戸書状之控(同第十巻 仲間記録第九巻 大阪府立中之島図書館 に伴って生じたことで、裁配帳第二番史記一件出入(大坂本屋 林論又入並に同点付の願株に対して、八尾板元の敦賀屋九兵衛 六拾六枚を紅屋板元中(敦賀屋九兵衛・河内屋喜兵衛・糸屋市 人へ永代売渡しされ、且又、敦賀屋・井筒屋は半数乃ち板木百 原屋清右衛門・同与左衛門・増田屋源兵衛三軒との相合板とな 同年五月には、此の両人より、大坂奈良屋長兵衛が求板し、柏 七月)に慶應元(一八六五)年九月の京都丸屋善兵衛より大坂 本板株が、 但し、此時板木半分は既に焼失し、残り板木は三百三拾 京都書林仲間記録二 大坂より京都へ移った事情については未詳。 東京ゆまに書房 昭和五七年三月)に 慶應元年九月に 昭和五二年 昭和五 朝 間

尾甚四郎友春刊本 〈八尾版再刻本〉77寛文一二(一六七二)年——延宝二(一六七四)年京八

あり、 る。巻四五末葉表(版心題「寛文壬子年刊 下中縫に小題及び丁付があり、下象鼻に「八尾友春」と陰刻さ 象鼻に「寛文壬子年刊」と陰刻、 その下に「史記巻幾」、 にも返点縦点送仮名が刻され、正文には更に句点声点傍注のほ 序・凡例・読史総評・短長説、各巻首尾の諸評論並に上層標注 字或は三字の校語を附刻(有框)。 正文、 三注のほか前付の原 字、注小字双行、行十九字。上層標注行七字、凌李両氏按語低 中行両序末の題署は明刊李光縉増補本(5)・寛永十三年刊本 刻本(11)にも同様の加点がある。版心、大黒口単黒魚尾、上 版が初出である。後述するがほぼ同時期に刊行された紅屋板初 家評論及び標注への加点は寛永刊本にはなく八尾版としては本 か所々振仮名が附刻されている。首序・続史総評・短長説、諸 六・四糎、髙さ四・二糎の上層を含む)、無界、十二行、 巻之一(格) 温藤李光縉増補」、第二行低一格 「五帝本紀第一」と 義序末の原刊記は除去される。本文巻頭題署程式は「史記評林 とは異なり、凌氏原刊本(1)の程式を襲用している。 に同じで、目録は徐中行序と索隠序との間に配さる。 一格行六字。李氏増評には墨囲の「増」字を冠す。欄上に行二 一通本能寺前/八尾甚四郎友春開板」と、 首目の順次は寛永一三年刊後印本の神宮文庫蔵本以下の諸帙 小題及び丁付なし)に「寛文十三異年仲夏吉辰/ 寛永一三年刊本(6)に同じ。 四周単辺(二三・八×一 また巻末本文末一行 史記巻四十五 茅坤・ 洛陽寺 行十九 また正

四郎友春重刊」の両刊記を有す。を隔て「延宝二甲寅暦仲夏吉辰/洛陽寺町通本能寺前/八尾甚

と看做すべきであろう。
本版の刊年は従来寛文一三年とされ、延宝二年はその補修年とあられていた(長沢規矩也「和刻本史記解題」)が、寛文一三年を勘案すれば、本版の刊刻は寛文一二年に始まり、寛文一三年を勘案すれば、本版の刊刻は寛文一二年に始まり、寛文一とみられていた(長沢規矩也「和刻本史記解題」)が、寛文一と和の刊年は従来寛文一三年とされ、延宝二年はその補修年

倭板書籍考巻四に「寛文 (「文」は「永」) 十三年洛陽矢尾氏刊本ニハ点ナシ頃ロ福山水野君ノ儒士中嶋道允評林ニ点ス此本ニハニハ点ナシ頃ロ福山水野君ノ儒士中嶋道允評林ニ点ス此本ニハニハ点ナシ頃ロ福山水野君ノ儒士中嶋道允評林ニ点ス此本ニハ県道允と推定しうるが、中嶋道允については未詳。管見の及ぶところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現ところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現ところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現ところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現ところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現ところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現の重刊記を有す。また元禄九年刊増益書籍目録大全、同宝永六の重刊記を有す。また元禄九年刊増益書籍目録大全、同宝永六の重刊記を有す。また元禄九年刊増益書籍目録大全、同宝永六といら、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林にとから、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林にとから、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林にとから、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林にとから、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林にとから、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林にといる。

〈宮内庁書陵部蔵〉 二〇冊(エロ11)

改装茶色表紙(二六・九×一九・二糎)、外題は第一冊のみ

字書入あり。「図書/寮印」(朱方)の印記。ほぼ全巻に亘り朱引が施され、一部に朱句点、眉上にまれに校「史記評林」一」と、第二冊以下は「史記 幾」と墨書さる。

「勢陽津城/富岡蔵記」(朱長方)の印記あり。等からの朱筆引抄書入があり、内に「謙按」の按語を交える。「部朱句点朱引書入、眉上に史記測義、遷史戻柁、史記觽に右から左へ「新刻校正」と角書があり「史記評林巻」と題さ 茶色表紙(二七・三×一九・五糎)、題簽を有し、上方小区画

ている。一部朱句点、眉上に朱標注書入あり。第一冊見返に目録外題を朱書。寛文一三年の刊記は第一冊後見返に貼付され栗皮表紙(二七・一×一九・四糎)、題簽静嘉堂文庫本に同板。

記あり。 (追記4)(朱長方)、「文殿/之印」(朱方)、「神宮/教院」(朱方)の印「中川経晃奉納」と墨書。「経/晃」(双郭朱方)、「林崎文庫」

2)) 〈大阪府立中之島図書館蔵〉 欠目録・巻一―六、大二六冊(33.1

写である。また処々胡粉を用い訓点が訂正さる。本帙は、中井筆も交える)の書入が周密。書入は主として史記雕題よりの移と刻され下方の巻次数はない。寛文一三年の刊記欠落。以下のと刻され下方の巻次数はない。寛文一三年の刊記欠落。以下の22③)

70修太

書」(朱方)、「岡本撫山翁/遺書寄贈記」(朱長方)の印記あ

篇を抜き出し、「削柿」上下二冊に別綴されている。「岡本/蔵

履軒の史記雕題に倣い、秦本紀巻末より亀策列伝に至る計一三

(追記5)する。 (追記5)はの (追記5)はの (追記5)に改め、尾題及び版心の巻数を各巻「一百二十二」と二三至一二五は丁付を巻一二二末葉第十八丁に続け十九至四十のを、茅・徐二序の丁付を王叙に続け四至十と改刻。また巻一貞叙、一至三、茅坤序、一至三、徐中行序、一至四とあったも貞の (追記5)により、 (記証5)により、 (追記5)により、 (記証5)により、 (記証5

〈都立中央図書館蔵〉 二五冊(和旨)

とあり、大題下方に巻次数あり。 薄茶色表紙(二七・一×一九・三糎)、題簽角書は「新刻校正」

ル逓修本

読史総評を一至十七、短長説を一至三十終とする。)次の目録を一至十五、索隠序より引用書目までを一至四十三、める。(前掲都立中央図書館蔵本等早印本の丁付は徐中行序の通しで短長説首葉より末葉までを「十八」至「四十七終」と改通しで「一」至「六十八」とし、 読史総評と附短長説上・下を通けの丁付改刻。即ち王世貞叙首葉より引用書目末葉までを

〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 五〇冊題簽角書は「新刻校正」或は「新版考正」と刻さる。

長方)の印記。 圏点朱引、眉上に墨筆標注書入あり。「正新館/図書記」(朱大圏に朱引、眉上に墨筆標注書入あり。「正新館/図書記」(朱大香色表紙(二七×一九糎)、後補書題簽「史記」と墨書。朱

〈同蔵〉 欠巻六一一六七、一○七一一三○ 二○冊

/文庫」(朱方)の印記あり。 首百拝(印)」と墨書捺印さる。「宮崎/文庫」(朱方)、「神宮記全百三十巻二十五冊享保癸卯孟夏之吉摂江梅庵主入合田新稽記全百三十巻二十五冊享保癸卯孟夏之吉摂江梅庵主入合田新稽記金長紙(二七・七×一九・二糎)、題簽角書「新版考正」、但

縹色布目表紙。題簽角書「新版考正」、但し殆ど剝落。「藤/〈同蔵〉 二五冊(増四・五丁三ろ33) 山口猛之亮献納本

園」(朱方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。 〈都立中央図書館蔵〉 二五冊(特師) (追記6)

角書「新版考正」、大半が剝落し、書題簽を補う。 空押市松紋様濃縹色布目表紙(二五·八×一八·八糎)、 題 簽

〈刈谷市立刈谷図書館蔵〉 二五冊(331) 村上文庫

録外題を朱書す。ほぼ全巻に亘り朱引が施さる。 縹色表紙(二七・八×一九・一糎)、題簽角書「新版考正」、 目

〈蓬左文庫蔵〉 欠巻一二四・一二五 二五冊 (601)

縹色表紙(二七・七×一九・一糎)、題簽なく「史記一(ーニ+五

畢)」と朱書、目録外題が朱書さる。

空押卍つなぎ縹色表紙(二六·五×一八·九糎)、 〈大阪大学附属図書館蔵〉 二五冊(diHI) 新版考正」。「屋庫/守文」(朱方・回文)、「原田氏/蔵書印. 題簽角書

、朱長方)、「宮崎/蔵書」(朱方)の印記あり。

伝写され通行した。全篇にわたって墨筆で訓点が訂正されてい 履軒門人の手によって整理され未刊ながら「史記雕題」として 首/巻二冊目録/之外無足存/者今釆目録/而余皆删之」と。 以下亀策伝に至る一三篇を収め、首冊の目録首眉上に「評林有 に原本の序、読史総評等目録を除く前付を収め、下冊に補史記 此の両冊は題簽の評林二字を削去して「削柿」と墨書し、上冊 朱引墨句点、上層及び欄上に墨筆書入がある。この書入が後に 空押菊花唐草紋縹色布目表紙(二七·六×一九糎)、題簽角書、《同蔵》 中井履軒自筆雕題書入本 二九冊(引表H德) 新版考正」。本帙は首冊の前に「史記削柿」上下二冊を配す。

> る。「天生/寄進」(朱長方)、「天楽」(朱長方)の印記 〈斯道文庫蔵〉 松崎慊堂自筆書入本 二五冊(ロロユュ25)

本・新刻本等諸本との校合、及び陳明卿史記考、牛氏空山堂史 考正」。 朱引朱圏点が施され、 書入は本紀及び列伝後半に周密 書震沢氏刻梓欵津軽卿雲望之所蔵」 と墨書さる。 「益城松氏」 案語等を交える。目録末框外のど部に「復日手校宋板目尾有篆 記・漢書・史略・文昌雑録等諸家所説の抄録引照、並に慊堂の 本、他に唐本評林本・明南監本・汲古閣本・史記論文・古活字 で、欄上及び上層余白に主として狩谷棭斎蔵震沢 王氏 覆宋刊 (紅屋板) 二四冊 (史I33) 蔵書/之記」(朱方)の印記あり。中山久四郎博士旧蔵書。 (朱長方)、「辛卯/明復」(白方)、「翶仙」(朱方)、「中山氏/ 空押唐草縹色布目表紙(二七·七×一九糎)、題簽角書 一新版

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 首目配寛又一三年 積穂 堂刊本

朱句点圏点声点、欄上に朱藍墨の書入が周密。また処々訓点が 題簽が重貼され、角書は「新刻/校正」と。第一冊首序より短 を抄録し案語を加える。「山本/蔵書」(朱方)の印記あり。 訂正されている。書入は胡三省・徐孚遠・皆川淇園等諸家評説 るが、装訂題簽等は他冊と異ならない。補史記及び列伝に朱引 長説までの序目は寛文一三年積徳堂刊本(11)で補配されてい 縹色表紙(二七・八×一九・五糎)、題簽は元題簽の上に新刻

〈内閣文庫蔵〉 二五冊 279 31

は 空押花紋濃縹色布目表紙(二五・六×一八・八糎)、 「新刻校正」と。伯夷列伝等一部の行間或は欄上に墨筆の字

あり。「太政官/文庫」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記「太政官/文庫」(朱方)、「日本/政府/図書記」(朱方・消印)、文庫」(朱方・巻一二六首)、「外務省/図書記」(朱方・消印)、「山本/義等の書入あり。「平城/蔵書」(朱方・第三冊見返)、「山本/

点が訂正さる。次の校読識語あり。 を押菊花紋茶色表紙(二六・八×一八・五糎)、題簽角書「新刻校正」、目録外題が墨書さる。 墨朱青の書入周密。 朱青の句刻校正」、目録外題が墨書さる。 墨朱青の書入周密。 朱青の句刻校正」、目録外題が墨書さる。 墨朱青の書入周密。 朱青の句刻校正」、目録外題が墨書さる。 墨朱青の書入周密。 朱青の句点が訂正さる。次の校読識語あり。

安政元年十一月廿三日校 公復(巻八八末)

安政二年孟春廿有一日 復読(巻九九末)

安政二年卯二月朔朝読午日也 復 (巻一一一末)

また巻一二五尾題後末葉裏に、

常陸なる筑波の峯のふもとには

鬼とりひしぐ武夫ぞすむ

から錦立田の奥にひとむらの

緑をのこす竹原の山

岩金もくだちざらめや武夫の国の

為とて思ひ切る大刀

慶應三年丁卯正月十九日終 復堂書

首冊見返に、「本書墨書書入ハ頼三樹也三樹此ノ本ヲ水戸ノ某と詠歌三首が朱書さる。復、復堂は頼支峯(山陽の次男)か。

あり。 雄蔵/書之印」(朱方)、「三矢氏/蔵書/之章」(朱方)の印記重松」と朱識語が見えるが、 根拠詳らかでない。「長谷川/澄士ニ贈レルナリト云フ/明治四十五年四月飯田町書店ニ求ム

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五冊(324)

「田部苔園翁/遺書」(朱長方)の印記あり。な補修改刻の根跡がある。「苔園田/部氏蔵/書印記」(朱方)、刻校正」。 漫漶甚だしき後刷本。 巻一二二第一七葉裏に部分的空押菊花文緑色表紙(二五・六×一八・七糎)、題簽角書、「新

いる。寛政四年以降、大坂敦賀屋九(注15) 田屋太右衛門へ売渡されているが、 へ移った経緯については不詳。 大坂敦賀屋九兵衛等より京都丸屋善兵衛 此時には既に焼株となって

8天明六(一七八六)年京八尾甚四郎友春覆寛文一二至 延宝二年刊本

〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 次掲の修本の原刊記及び奥付に依る。 見存完本の所在未詳。 存序目・読史総評一巻

その所持分は河内屋嘉市及び敦賀屋九兵衛が支配することとな 衛がそれぞれ二歩半株の割で求板し、雑喉屋・板屋は素人故、 三郎兵衛・板屋孫兵衛両人が半株、井筒屋伝兵衛・敦賀屋九兵 面精美なる早印本である。初印零本と見做し此処に著録する。 録」と刻さる。「稽古館」(朱長方)、「彦藩/弘道館/蔵書印」 (朱長方)の印記あり。本冊は次に掲出する修本諸帙に比し、印 新刻校正」と角書があり「史記評林」の大題下方右寄に「序目 本板株は寛政元(一七八九)年九月、京都より、大坂雑喉屋 空押菊花雷文繁濃縹色表紙(二六・二×一八・六糎)、題簽、

徐中行序の次にあった目録を引用書目の次に配す。本文巻頭題 版式字様共に前刻に似る。補修の個所は未修完本未見の為不 本版は前記寛文一二至延宝二年刊本(7)の覆刻本であり、 題簽角書は「新刻校正」。 8-寛政四(一七九二)年修大坂松村九兵衛等印本 序目順次は前刻とやや異なり、

> 森田伝兵衛は井筒屋、高橋平助は塩屋興文堂であろう。雑喉坂書林森田伝兵衛」なる奥付あり。松村九兵衛は敦賀屋文海堂、明六丙午年再彫/寛政四壬子年補鐫/広華 堂蔵 板(大字)/大明六丙午年再彫/寛政四壬子年補鐫/広華 堂蔵 板(大字)/大 さ四糎の上層を含む)、無界十二行、 行十九字、 注小字双行、 署程式は前刻に同じ。 屋・板屋両人所持の素人株の支配人が河内屋嘉市より塩屋平助 梓行」なる刊記があり、後表紙裏に「寛文十二壬子年新刻/天 尾友春」と陰刻さる。最終葉裏第九行下方に「八尾甚四郎友春 版心大黒口単黒魚尾、上象鼻に「天明丙午再刊」(巻六七第七 行十九字、 上層標注行七字 或は 六字、 李氏増評頭には 墨囲の 七-- | 三〇 七冊

>

>

> <b 八丁等「寛文壬子年刊」と底本のままに誤刻)、下象鼻に「八 - 増」字を冠す、欄上に行二字或は三字の校語が刻さる (有框)。 移ったものと思われる。広華堂は雑喉屋或は板屋の堂号か。 四周単辺(二三・二×一六・一糎、内に高

学/校書籍縦覧/所蔵書之印」(朱方)の印記あり。 ど剝落。奥付の「高橋平助」下に押印あれども読めず。 館」(朱長方)、「彦藩/弘道館/蔵書印」(朱長方)、「大津師範 空押菊花雷紋繋濃縹色表紙(二六・一×一八・四糎)、題 簽幾

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 欠首目 四八冊 332-1 22

書籍印」(朱方)、「府立大阪/書籍館/図書印」(朱方)の印記。 書題簽を補う。「野篁亭/蔵書記」(朱方)、「大阪師/範学校/ し下方の冊次数は「四」至「四十八」と、第一至三冊は落剝し 香色艶出表紙(二六×一八・八糎)、第四冊以下は元題簽を存

清白」(朱長方)、「神宮/文庫」(朱方)の印記あり。 数は、「序目録」「一」至「二四」。朱で送仮名等の訂正、首十四 巻、欄上に語義等の書入。「陽田津/守氏蔵/書之記」(朱方)、 御巫書蔵」(朱長方)、「昭和二十年九月献納/神宮文庫 〈神宮文庫蔵〉 空押雲龍紋縹色表紙(二五·六×一八·六糎)、 二五冊(増四、五丁三ろ275) 御巫清白氏献納本 題簽下方冊次

〈京都大学附属図書館蔵〉 二五冊(542シ) 谷村文庫 空押花紋雷紋繋濃縹色表紙(二五·七×一八·七糎)。 8分後印本

後の奥付を有する完本は未だ管見に入らず。 〈東北大学附属図書館蔵〉 奥付の書林名「高橋平助」を「伊藤七郎兵衛」と控改。 存巻五一七、一二二一一二三〇 二冊 控改

(77)の補配本である。 後補縹色布目表紙(二五·四×一八·五糎)。 前記同館儲蔵本

8-大坂敦賀屋九兵衛等後印本

〈内閣文庫蔵〉 二五冊(2927)

衛・大坂敦賀屋九兵衛等計八軒の書肆名を列記 せる 奥付 が あ に「三都発行書房」として京都銭屋惣四郎・江戸須原屋茂兵 (墨長方)、「安政乙卯」 (朱無框)、「大学/蔵書」 (朱方)、「大 空押亀甲花紋濃縹色表紙(二五・七×一八・七 糎)。 後 表紙裏 敦賀屋九兵衛の下に「版」字が刻さる。「昌平坂/学問所」 /図書」(朱方)の印記あり。

〈大阪天満宮蔵〉

二五冊 (史13)

末の大坂敦賀屋九兵衛下に「文海/堂記」(白方)の捺印あり。 〈内閣文庫蔵〉 二五冊 天満宮御文庫奉/納書籍不許売買」(朱長方)の印記あり。 空押亀甲花紋濃縹色表紙(二五・八×一九糎)。奥附の書肆名

郎・大坂敦賀屋九兵衛・同彦七等計八軒の三都発行書肆が列記 印」(朱長方)の印記あり。 され、 両敦賀屋下に「板行」の二字が刻さる。「教部省/文庫 裏の奥付は前掲本とは別板で、江戸岡田屋嘉七・京銭 空押雷紋繋花紋濃縹色表紙 (二五・九×一九・二糎)。 屋摠四 後 表

279 28

り別家し、本屋仲間に加入している。 (注20) 敦賀屋彦七は嘉永五(一八五二)年閏二月、同九兵衛手代よ

8*京丸屋善兵衛後印本

(慶應義塾図書館蔵) 二五冊 $\binom{2}{4}$ 25 中井龍子寄贈本

丸屋善兵衛は、慶應元(一八六五)年九月、本板丸株の内浅、大屋善兵衛 丸屋善兵衛 山中瑞錦堂 山中瑞錦堂 と記せる奥付を有す。 「平安書空押亀甲繋濃縹色布目表紙(二六・五×一八・八糎)。「平安書空押亀甲繋濃縹色布目表紙(二六・五×一八・八糎)。「平安書

衛門方へ永代売渡している。(注15) 井伊予助所持、丸屋支配の四軒之壱軒前(焼株)を八尾板古板 無点及び点付株等とともに、代銀七貫五百目で大坂秋田屋太右

8个大坂秋田屋太右衛門等後印本

並短長説二巻、巻六六―一〇六 一八冊 〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 欠首目・ 読史総評一巻

空押菊花雷紋繋濃縹色表紙(二五・四×一八・八糎)。 末冊 後表

〈同蔵〉 二五冊

甚だ磨滅せる後刷である。 ・東衛」と控改せる広華堂蔵板の奥付を有すが、此の奥付は印面り、更に後表紙裏には前記(∞)の「髙橋平助」を「伊藤七郎阪秋田屋太右衛門等計十名の三都発行書林を列記せる奥附があ版秋田屋太右衛門等計十名の三都発行書林を列記せる奥附があを、と巻末葉との間に江戸須原屋茂兵衛・京都勝村治右衛門・大経と巻末葉との間に江戸須原屋茂兵衛・京都勝村治右衛門・大空押飛雲紋代赭色表紙(二五・八×一八・八糎)。末冊の後表

〈京都大学文学部蔵〉 二四冊 (哲BC5)

記せる奥付あり。都丸是善兵衛・大阪秋田屋太右衛門等計十二軒の発行書肆を列に江戸須原屋茂兵衛・備前片山屋孫兵衛・備中太田屋六蔵・京空押亀甲紋繋濃縹色表紙(二五・五×一八・五糎)。後表紙裏空押亀甲紋繋濃縹色表紙(二五・土

8大阪堺屋新兵衛等後印本

〈内閣文庫蔵〉 二五冊(2726)

平坂/学問所」(墨長方)、「大学/蔵書」(朱方)、「浅草文庫」兵衛より大阪堺屋新兵衛に至る計六軒の書林名が記さる。「昌(二五・五×一八・四糎)。未冊後表紙裏の奥付には江戸須原屋茂(二六・三×一九・四糎)、第四―二五冊は空押電対繋濃縹色表紙同版二種の取合せ本。第一―三冊は空押亀甲花紋濃縹色表紙

印記あり。無框・第四冊以下)、「清水/教/諭所」(墨方・第四冊以下)の(朱長方)、「安政乙卯」(朱無框・第一―三冊)、「慶応乙丑」(朱

(一八二七)年四月、堺屋新兵衛と家号を改めている。 り別家し本屋仲間に加入、当初秋田屋新兵衛と号した。同一〇 堺屋新兵衛は文政九(一八二六)年九月、秋田屋太右衛門よ

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五冊(3322②)8大阪河内屋茂兵衛等後印本

印」(朱方)、「府立大阪/書籍館/図書印」(朱方)の印記あり。茂兵衛等計八軒の三都書林名を列記。「大坂師/範学校/書籍裏奥付に、京都河内屋藤四郎・江戸須原屋茂兵衛・大阪河内屋大題下方に「八尾板/壹(一二十五)」と刻さる。末冊後表紙大題下舞亀甲繋濃縹色表紙(二五・五×一八・七糎)、題 簽改 刻、空押亀甲繋濃縹色表紙(二五・五×一八・七糎)、題 簽改 刻、

六年刊本 〈八尾版三刻本〉9明治一三(一八八○)年四月大阪松邨九兵衛等覆天明

喜兵衛・松邨九兵衛の五出版人名及び住所が列記さる。次行以下大阪豊田宇左衛門・大野木市兵衛・前川善兵衛・柳原

〈斯道文庫蔵〉 二五冊(22125)年刊本を初版とみなして「明治三刻」と謳ったのであろう。年刊本を初刻とすれば、第四版となる。款式を同じくする延宝二刊本を初刻とすれば、第四版となる。款式を同じくする延宝二せる覆刻本である。尚、八尾版三刻本と言われているが、寛永本版は、字様、訓点等も天明六年刊本(8)をそのまま踏襲

〈大阪天満宮蔵〉 二五冊(史14)

の印記あり。 補写。「猶興書/院図書」(朱長方)、「螢/雪軒/珍蔵」(朱方) 空押行成紋濃縹色表紙(二六×一八・九糎)。巻二第二一葉は

〈都立中央図書館蔵〉 五〇冊(井郎)

縹色表紙(二六·五×一八·九糎)。

9月九月印本

奥付の第三行に「同 十三年九月十五日別製本御届」とある。

〈内閣文庫蔵〉 五○冊(292)

方)の印記あり。 も別版。「太政/官記/録印」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱も別版。「太政/官記/録印」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱

〈都立中央図書館蔵〉 二五冊(和8)

濃縹色表紙(二六×一八・八糎)、題簽下方の「八尾版」の三

字なし。「久木/田印」(朱方)の印記あり。

七刊奥田遵校点本 覆天明六年刊本10明治一二(一八七九)—一五(一八八二)年東京別所平

有志梓」(第一冊)等と題され、左下方に、上部に「東京書林」見返があり、「明治十二年紀十二月翻刻/桜史記評林/東京同人 一 訓遵奥 点 田 行、 帝本紀第一 (隔五) 日本 奥田遵校正」と題す。最終尾題は「史 総評」、「短長説上・下」、「史記正義諡法解」、同列国分野、譜 茅坤・徐中行の三原序(小室樵山書、序末の題署体式は八尾版 と横書し下に「神田明神下/湯嶋本住町/万青堂島屋/別所平 高さ四・一糎の上層を含む)、無界十二行、行十九字、注小字双 文巻頭「史記評林巻之一 (隔五) 呉興凌稚隆輯校、 系・地理図、姓氏は末冊に置く。第二冊首に補史記があり、本 義論例」、引用書目、凡例、目録と続き以上を首冊とし、「読史 同後序、「補史記序」、「史記正義序」、「史記集解叙」、「史記正 再三刻本同様明凌稚隆原刊本の体式に同じ)、「史記索隠序」、 月/東京 島田重礼撰/市河三兼書」)を冠し、以下王世貞・ (朱方)の印が捺さる。首に「新刊史記序」(「明治十二年十一 七印」とある朱長方印が鈴さる。扉中央には「同人社/中之印 尾)」と題署さる。第一・一〇・二〇・三〇・三七・四四冊に 記評林巻之一百三十大尾」と。四周単辺(二二・九×一五・一糎、 空押亀甲花文葡萄色表紙 (二六·五×一八·四糎)、 行十九字、上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字、 字史記評林序并総目録 首(一一百二十九之/百三十/終、 次行低一格「五 題簽は

「明治十二年十二月」(第一冊)、「明治十五年一月」(第二○冊)、「明治十三年十二月」(第二○冊)、「明治十三年十二月」(第三一至六〇の世家は十五年一月」(第四四に十三年六月より十四年五月にかけて巻六一至一三〇の列伝部に十三年十二月」(第三七冊)、「明治十四年五月」(第四四川治十三年十二月」(第三七冊)、「明治十四年五月」(第四四月返の右区画の年月は「明治十二年十二月」(第一冊)、「明月返の右区画の年月は「明治十二年十二月」(第一冊)、「明月返の右区画の年月は「明治十二年十二月」(第一冊)、「明月返の右区画の年月は「明治十二年十二月」(第一冊)、「明月返の右区画の年月は「明治十二年十二月」(第一冊)、「明月である。

田遵識」とある如く、欄上標注は遷史捩柁、史記雕題の抄録に当"作"一書,以審"之 明治十二年十二月 長尾後学 龍湫奥部見於其間,併掲,之欄上,但以,紙幅有が限不,復一一識別,他日誤謬、今据,皆川淇園先生捩柁中井履軒先生雕題,以訂,其訛,附,東記評林凡例」末に「史記世乏」善善本,索隠正義等文字頗多)

校者の按語を交えたものである。

旧本を改め、やや校点者の趣意が加わっている。旧本を改め、やや校点者の趣意が加わっている。似し、その粗なる覆刻本と言えるが、返点送り仮名振仮名等は本版は八尾版天明六年刊本(8)と字様、行格版式等ほぼ類

〈国立国会図書館蔵〉 五〇冊(603)

方)、「加賀美光賢(左右に「東京芝区三田町/壱丁目卅五番地」九・二九・三六・四三冊の奥付無し。「加賀美/蔵書印」(朱長第一〇・二〇・三〇・三七・四四冊の 見返及び、第九・一〈慶応義塾図書館蔵〉 五〇冊(1995) 加賀美繁子寄贈本

(内閣文庫蔵) 五〇冊 (2734)

と)」(朱長方)の印記あり。

政官/文庫」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記あり。「秘閣/図書/之章」(朱方)、「太政/官記/録印」(朱方)、「太第一冊見返の左区画「十二月」下の「翻刻」の二字がない。

10明治二五 (一八九二) 年修文館印本

広次に至る六人、各人名下に捺印あり)が、 者名及び発行兼印刷者名(上総の能勢嘉左衛門より三州の高須 り、「明治十二年十一月四日御届同世五年三月七日求版」、 ○・五○冊末葉(版心上象鼻題「校字訓点史記」) 増補」、下方に「島田重礼先生序/奥田遵先生校字」、左区画に 右区画上部に「龍門司馬遷 一一・二一・三一・四一冊の見返に、中央に「再版史記評林」、 発行書肆 題簽、「極字史記評林與田邊校字一 (一五十止)」と題す。 修文館蔵版」と題さる。第一〇・二〇・三〇・四 著/呉興凌稚隆輯校/温陵李光縉 その裏に上総東金 に奥付 以下校正 第一・ があ

り函館魁文社に至る各地売捌書肆計三八名が列ねらる。売書肆名が列記さる。更に、末冊の後表紙に大阪柳原喜兵衛よ盛松館多田屋本店より東京松柏堂出雲寺万次郎に至る十名の専

〈都立中央図書館蔵〉 五○冊(特師)

濃縹色表紙(二六·三×一八·三糎)。

 \subset

が附刻さる。 並に返点縦点送仮名、正文には更に句点声点旁注、時に振仮名 五乃至六字。李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。三注評注 異なる。「史記正義序」尾題前の熊体忠・劉朝箴の原刊記を存 注小字双行、上層標注行六乃至七字、凌・李氏按語は低一格行 高さ三・九糎の上層を含む)、無界十二行、行廿二乃至廿四字、 す。本文巻頭「史記評林巻之一 (格一) 温陵率光網増補」、第二行低 李光縉増補本(5)・寛永一三年八尾助左衛門尉刊本(6)とは 坤・徐中行両序末の題署程式は凌氏原刊本(1)に倣い、明刊 明六年刊本(8)に同じく引用書目の次に配さる。 なお、 茅 王世貞叙以下前記八尾版諸版と同内容の首目を有す。目録は天 有すること、紅屋版の一特徴であるが、 其の出処不明)、 次に 拝言」と題し、末に「史記評林首叙」と)を冠し(此の序文を 下方に各冊所収の 巻 次 を 刻 す(末冊「巻一百廿九/之三十大 格「五帝本紀第一」と題す。四周単辺(二四・一×一六・四糎) 題簽は、「新刊/挍正」と角書があり「史記評林」と題し、 11寬文一三(一六七三)年京積德堂刊本〈紅屋版初刻本〉 版心白口単黒魚尾(まれに双黒魚尾の葉あり)、

本版の開板は八尾版再刻本(7)とほぼ同時期に進められ、本版の開板は八尾版再刻本(7)とで、八尾版再刻巻四五末の刊記がこの方がわずかに早く刻成した。八尾版再刻巻四五末の刊記が本版の開板は八尾版再刻本(7)とほぼ同時期に進められ、

韻学、円機活法詩韻全書等を刊行せる京烏丸の書肆。 積徳堂は寛文延宝の間に大倭廿四考、和名類聚抄、円機活法

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 五○冊(史Ⅰ88)

翻寺)の印記あり。 香色表紙(二七·五×一九·三糎)。「光台院 蔵」(朱長方・醍

〈尊経閣文庫蔵〉 五〇冊

記あり。 香色表紙(二七・五×一九・六糎)。「怡斎/図書」(朱方)の印

七)があるが未見。 | 出五冊(22、欠巻六一―六年児島大学玉里文庫目録著録本 | 二五冊(22、欠巻六一―六年児島大学玉里文庫目録著録本 | 二五冊(22、

11口後印本

〈大阪大学附属図書館蔵〉 巻六一―六九(第一六冊)配明和七ものに限られる。以下はその刊記を欠く後印本である。 紅屋版初刻本で刊記を有するものは極めて尠く、ごく早印の

年世裕堂刊本 二五冊 (1.03 HI) 岡田文庫

褐色表紙 (二七・五×一九・五糎)、

題簽様式は前掲二本に同

〈慶應義塾図書館蔵〉 二五冊(№725) 北野元一寄贈書蔵」(朱方)、「小高/文庫」(朱円、第一六冊のみ)の印記あり。冊)はやや後出印本で補配された取り合せ本である。「山東/氏じくも下方の巻次数なし。 巻一○四至一三○(第二一至二五

の印記。 また、処々、朱で訓点が訂正されている。「北野/蔵書」(朱方)に朱引朱圏点、欄上或は上層余白に朱筆の校字等の書入あり。茶色表紙(二六・三×一九糎)、題簽同前。巻四四以降、一部

藤房夫寄贈書(岩瀬文庫蔵) 欠補史記一巻、巻一―四(二四冊(5132) 近

印記あり。 ま朱圏点、墨筆標注書入あり。「中観坊/興雲蔵」(朱長方)のま朱圏点、墨筆標注書入あり。「中観坊/興雲蔵」(朱長方)の空押市松紋縹色表紙(二六・一×一八・八糎)、題簽同前、 ま

〈内閣文庫蔵〉 欠目録、巻七 二五冊(2924)

印記あり。
(追記7)「司法省/図書記」(朱長方)、「日本/政府/図書」(朱方)の刻さる。朱で訓点を訂正、また上層余白にまま校字書入あり。は前掲諸本と異なり、上部区画の角書は「新刻校正」と一列に後補空押卍つなぎ雲龍紋黄色表紙(二六×一八・六糎)、題簽

〈大阪大学附属図書館蔵〉 二五冊(01 記HI

〈京都大学附属図書館蔵〉 二五冊(42シ2)掲諸本と異なる。目録外題が朱書さる。印面漫滅せる後刷本。改刻、角書中央に縦線が入り「新刊/校正」と、大題字様も前空押雷紋地花紋暗黄緑色表紙(二六・三×一九・一糎)、題簽

でない。元禄九年刊増益書籍目録大全、同宝永六年増修本、 と注があり、八尾、小紅ヤの両名が標記されている。また、元 正徳五年修本に史記評林新版が著録され、「評点付二板アリ」 堂より、ほぼ時と所とを同じくして刊行されている。 機活法詩学二四巻が寛文一三(一六七三)年に八尾甚四郎友春 尾、少紅は紅屋であろう。活法は円機活法で、菊池耕斎訓点円 禄太平記巻之一京と大坂に本替の沙汰に「中頃史記―活法の争 災ニカヽリテ、鳥有トナル」とあること、水沢博士が既に指摘(注22) 内山孝之助此本ヲ蔵ス、評林ニハ点ナシ、五七年以前祝融氏ノ 紅屋トアリ」として「孝云寛文十三年元刻ノ本今アリヤ、亡友 たものか。尚、岡本保孝の史記伝本考、紅屋板の項に「縫心ニ 梁文堂をいい、 紅屋喜兵衛(柳原氏)の名があることから、紅屋とは或はこの 紅屋と称した明証は無く、元禄以降、京堀川の書肆に梁文堂小 より、同点円機活法韻学一四巻が延宝元(一六七三) ひにて、七屋はおとろえ、少紅はすたりぬ」とみえ、七屋は八 されているが、かかる伝本を儲蔵するところを聞かない。 積徳堂刊行の本版がなぜに紅屋板の呼称を得たものか明らか 積徳堂の斜陽により、其の蔵板が小紅屋に移っ 年に積徳 積徳堂が

本 〈紅屋版再刻本〉 12:明和七(一七七〇)年京世裕堂覆寛文一三年積徳堂刊

年癸丑二月元刻/明和七年庚寅三月再刻/京都 書肆 蔵版」なる刊記がある。 第一葉版心下象鼻に「芥氏句読」と刻さる。末葉に「寛文十三 いる。版心白口単黒魚尾「史記巻幾 (小題)(丁付)」、巻二三 まれに傍注があるが、寛文十三年刊本に比し大半は省刻されて 字の校字あり。返点縦点送り仮名、正文には更に句点を附刻。 年刊本に同じ。 左右双辺(二三・六×一六・一糎、 高さ二・七糎 と同諡法解との間に配さる。本文巻頭題署程式は前掲寛文一三 尾」(第五〇冊)等と巻次が刻さる。 首目序次内容は前記寛文 題し、その下に「読史総評/短長説」(第一冊)、「序目録」(第 行、上層標注行五字、凌李両氏按語低一格行四字、欄上に行二 の上層を含む)、有界十二行、行廿二字乃至廿四字、注小字双 二冊)、「巻之一/之七」(第三冊)、「巻百廿九/之百三十/大 一三年刊本(11)にほぼ同様であるが、目録は「史記正義論例」 上方小区画に「校正/再板」と角書、「史記評林」と 世裕堂

みられない。加点者芥氏は未詳。或は芥川丹丘か。覆刻であるが、訓点は少しく異なり大率簡略で、振仮名は殆ど本版は、標注を除く本文及び序目は寛文十三年積徳堂刊本の

〈蓬左文庫蔵〉 五○冊 (6014)

方)の印記あり。 白色表紙(二八・八×一九・四糎)。「張府内/庫図書」(朱長

冊)、第二冊以下は一から廿四と冊次数のみが刻さる。本で、 題簽書名下には、「序目録/ 読史総評 / 短長説」(第一尚、本帙の如き五〇冊本はまれで、見存諸帙の殆どは二五冊

・香色受氏(ユン・ルく・しょ、) 東づ。「方里で作って快速方で、人大阪大学附属図書館蔵》 二五冊(JuleH) 大江倫子寄贈本

香色表紙(二六・九×一八・六糎)。「万里文庫」(朱長方)、香色表紙(二六・九×一八・六糎)。「万里文庫」(朱長方)、

平安大/江氏蔵」(朱長方)の印記あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五冊(33280)

の墨筆書入あり。「西邨/柳攻」(朱方)の印記あり。 の墨筆書入あり。「西邨/柳攻」(朱方)の印記あり。 目後、 読史総評前に配す(以下の諸帙も同様)。 附箋に語釈等 香色表紙(二七·二×一八·四糎)。 序目順次、 目録を引用書

〈神宮文庫蔵〉 二五冊(五乙二い85)

香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨香色艶出表紙(二五・九×一八・三糎)、右肩に目録外題が墨

〈豊橋市立図書館蔵〉 二五冊(226)

文庫」(朱長方)の印記あり。
(追記8)であ書入がある。「参河国羽田/八幡宮文庫」(朱長方)、「羽田をる書入がある。「参河国羽田/八幡宮文庫」(朱長方)、「羽田家)、四七(孔子世家)に、祖庭広記・博物志等諸書より引抄家)、四七(孔子世家)に、祖庭広記・博物志等諸書より引抄を開いる。

巻末に「寛文十三年癸丑二月元刻/明和七年庚寅三月再刻/12天明九(一七八九)年大坂柳原喜兵衛等印本

天明九年己酉正月求版/浪華書林 の奥付あり。

いる。 (注33) 木は、文化八(一八一一)年一〇月、酢屋六左衛門が買受けて は柳原氏であり、 糸屋は梅月氏であろう。 元されているから、本奥付と符合する。敦賀屋は松村、 京都ヨリ求板」と記され、 条に「史記評林 裁配帳二番 尚、 史記一件出入の 寛政元酉 寛政元年と改 糸屋所持の板 河内屋 正 月

〈都立中央図書館蔵〉 二五冊 (特 6604

図書」(朱長方)の印記がある。 墨校合書入あり。蜂屋椎園手校か。 朱引、欄上に八尾板、二十一史本、張守約本、嵯峨本等との朱 空押雷文地花卉文縹色表紙 (二六·二×一八·三糎)。 「蜂屋蔵」(朱長方)、 朱句点 権園

〈宮内庁書陵部蔵〉 二五冊 204 121

点の書入あり。「古賀氏/蔵書章」(朱長方)、「京都) 、図書之印」(朱方)の印記がある。 空押菱型菊花紋縹色表紙(二五・八×一八・五糎)。 /帝国大学 朱句点圈

〈慶応義塾図書館蔵〉 二五冊(179 155 25)

記あり。 なり、「新版考正」の角書がある。 香色表紙(二六・一×一八・六糎)、 「窟河/翼斎」(朱方) 題簽様式、 第七冊のみ異 の印

(内閣文庫蔵) 欠巻八 <u>|</u> <u>一</u>四 ## 279 30

空押双円緊褐色表紙 「昌平坂) /学問所」(墨長方)、 (二五·八×一八·四糎)。 「文化癸酉」、 「浅草文庫」 部に朱引あ

> (朱長方)、「大日本/帝国/図書印」(朱方) 0 印 記がある。

大阪河内屋喜兵衛等後印本

〈慶応義塾図書館蔵〉 二五冊(25125)

衛・尾州永楽屋東四郎・大阪河内屋喜兵衛等計一三名の 冊後表紙裏に奥付があり、 書房柳原積玉圃蔵書目録北久太郎町河内屋喜兵衛」と題さる。 に「積玉

・
蔵書

・
は、

・
版心題)

三丁を

が級、 目録」所掲書のうち左繡全十六冊は嘉永七(一八五四) 學を記し、
 蔵書印」(朱方)、「学校之印」(朱長方)の印記あり。 あるから、 空押雷文繋地花卉文縹色表紙 (二五・八×一八・七糎)。 本帙はそれ以後の印本と見做し得る。 河内屋喜兵衛下に「板」字が刻さる。「積 江戸須原屋茂兵衛・京吉野屋仁兵 各葉首に 「佐 ҳ 玉 年刊で 二圃蔵書 ,発行書 木氏/ 「浪華 巻末

〈内閣文庫蔵〉 二五冊 279 25

P 省 書と異なり、京都吉野屋仁兵衛より大阪河内屋喜兵衛板に至る 「大政宮/文庫」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)、 一三名の発行書肆名が記され、 空押波紋濃縹色布目表紙(二六・三×一八・七糎)。 /図書印」(朱方・消印) 江戸須原屋伊八を欠き、 の印記がある。 尾州万屋東平が加わって 書肆名ほとんど前書に 奥付 同じく V 一宮内 る。 は

12=明治印本

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五册 朝日332.18

発行書肆名を記し、 奥付に讃州高松本屋茂兵衛より大坂敦賀屋九兵衛に至る十二の 空押卍繁黄色布日表紙(二六×一 敦賀屋九兵衛下に「梓」字が刻さる。 八·五經)。 末冊後表紙裏

れ、本帙は漫漶甚しき明治に入って後の後刷本である。名中、須原屋茂兵衛等に東京と、銭屋惣四郎等に西京と明記さ

)明治期刊行諸版その他

屋佐兵衛」とあり、中央上方に「鶴牧/修来館/蔵版」の朱方通二丁目に、「官許」明治二己巳年正月十三日/発行書林」玉山堂山城に、「官許」明治二己巳年正月十三日/発行書林」玉山堂山城 に、「官許 明治二己巳年正月十三日/発行書林 玉山堂山城光縉増評には頭に墨囲の「増」字を冠す。巻末最終葉裏の奥附 白口単黒魚尾「増訂史記評林 巻幾 (ハ題) (丁付)」、下象鼻に 行十九字。上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。版心 温陵李光續增補/「五帝本紀第一」と題し、尾題は「史記評林巻呉興凌稚隆輯校/「五帝本紀第一」と題し、尾題は「史記評林巻 さ三・九糎の上層あり。有界十一行、 行十九字、 注小字双行、 る)と同校者名を署す。 之幾終」、各巻尾題下に「m~gg 同校」(左側の氏名は各巻異な 李生増補史記評林」は無い。本文巻頭「史記評林巻之一 (幅五) 三冊首に「補史記」を配す。紅屋版の首に冠せる黄洪憲「叙 を第一冊、目録・「読史総評」・「短長説」を第二冊に収め、 を冠し、王世貞「史記評林叙」以下「史記評林引用書目」まで 撰/(印)(印)/ 序」(「明治二年己已歳六/月/ 副知学事兼侍読/ 秋月種樹 字下に「修来/館章」の朱方印が鈴さる。首に「新刊史記評林 「修来館蔵」と。句点返点、正文には送り仮名・傍注附刻。李 刻/増訂史記評林/鶴牧修来館蔵版」なる封面を有し、「蔵版! 鶴牧藩版 明治二己巳年正月十三日/発行書林 明治二(一八六九)年刊田中篤実等校本 行政官録事金井之恭謹書/(印)(印)」) 左右双辺(一九·五×一五·一糎)、高 第

> 方印が鈐さる。 大印が、山城屋佐兵衛下に「東京書/舗玉山/堂之記」なる朱

校刊の経緯が記されている。 校刊の経緯が記されている。 参志順蒙官准、此本刊始成、将献呈一本、乞序於余。」と本版条右府謀、進読史記、以世無善本為憾、欲別刊一本以具御前。前坊刊諸本、太完善矣。余以謭劣、忝備員今皇帝侍読、嚮与三豊田一貫等、校正刊刻者。葢字画之楷正、校勘之精到、較之従豊田一貫等、校正刊刻者。葢字画之楷正、校勘之精到、較之従

〈内閣文庫蔵〉 五○冊(1933)

印」(朱方)の印記あり。 (朱長方)、「日本/政府/図書」(朱方)、「大学校/図書/之(朱長方)、「日本/政府/図書」(朱方)、「大学校/図書/之室押卍繋緑色布目表紙(二九・四×二〇・五糎)。「浅草文庫」

〈同蔵〉 五〇冊(2732)

昭和四十七年汲古書院刊和刻本正史史記の底本である。(朱方)、「大日本/帝国/図書印」(朱方)の印記あり。本帙は表紙同前。「浅草文庫」(朱長方)、「大学校/図書/之印」

屋惣七に至る九名の東京発弘書林を記せる奥附を有す。以下の諸帙は後表紙裏に彫工名及び、須原屋茂兵衛より上州

〈岩瀬文庫蔵〉 特大五○冊(458)

へ無導会図書官義〉(五○冊(真干品)本。「張南半田/三浦氏記」(朱長円)の印記あり。本。「張南半田/三浦氏記」(朱長円)の印記あり。特大特共空押唐草文黄色布目表紙(三九・四×二○・八糎)。特大特共

〈無窮会図書館蔵〉 五〇冊(真軒53)

(朱方)、「真軒/蔵書」(朱長方)の印記あり。 空押唐草文緑色布目表紙(二九・一×二〇糎)。「阪井/氏蔵

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 五〇冊 (史134)

庫」(朱方)の印記あり。 空押唐草文黄色布目表紙(二六·七×一八·八糎)。「三春/文

〈天理図書館蔵〉 五〇冊 (古231)

長方)の印記あり。 空押唐草文黄色布目表紙(二六・七×一九糎)。「古義堂」(朱

〈東北大学附属図書館蔵〉 五〇冊(A2-32)

印記あり。 書」(朱長方)、「田岡嶺雲遺書/田岡良一氏寄贈」(朱長方)の 空押唐草文黄色布目表紙 (二六・七×一八・九糎)。「□□蔵 (追記9)

〈斯道文庫蔵〉 欠巻一一二—一一六 四九冊

空押唐草文黄色布目表紙(二六·六×一八·四糎)。

〈慶應義塾図書館蔵〉 合三冊(Hマピ3) 星文庫

り。「星文/庫印」(朱長円)の印記。 刊記左下方に「山岸豊寿郎/営業店検閲」(朱長方)の鈐印あ は前記諸帙に同じくも字様異なり別版である。封面欠落。末葉 薄葉紙本。後補茶色布表紙(二六×一八糎)、題簽題署程式

を「明治二年己巳歳十月」と改める。 蔵朝臣種樹撰」、「従七位守少史源朝臣/之恭謹書」と、 ながら、撰者及び書家の官銜を「従四位守大学大監兼侍/読大 以下の諸帙は首の「新刊史記評林序」三葉が改刻され、 撰序月 同文

〈斯道文庫蔵〉 五〇冊 222 F 7 50

空押唐草文黄色布目表紙(二五·三×一七·九糎)。

〈慶應義塾図書館蔵〉 五〇冊 (62150)

長方)、「東京大学/図書之印」(朱方)の印記あり。 (朱長方)、「明治三十八年/東京帝国大学/図書館印之証」 (緑 表紙同前。「江守/蔵書」(朱方)、「江守善六氏/寄贈図書」

〈東北大学附属図書館蔵〉 五〇冊(222113)

の印記あり。 表紙同前。「西脇/蔵書」(朱方)、「第二高/等学/校図書」

〈慶應義塾図書館蔵〉 五〇冊(H46050) 星文庫

り「修来館/蔵版」の印文で方三糎のやや小振りのものであ 表紙同前。巻末最終葉裏の奥付中央の鈴印は上掲諸帙と異な

〈大阪大学附属図書館蔵〉 五○冊(stall 堂)、「碩園記念文庫」(朱名。「星氏之印」(朱長夫)々F≒==

長方)の印記あり。

〈東洋文庫蔵〉 一〇冊(Ⅱ185

記評林 薄葉紙本。茶色布表紙(二六×一八·五糎)、 一 (一十)」と題さる。 題簽異板、「哲

史

13、修来館水野忠順蔵版後印本

の左を「蔵版主修来館」である所名の方を「蔵版主修来館」が野忠順東京府本所区松井で東京府本所区松井で一行の「官許明光ニニー 行の「官許明治二己巳年正月十三日」はもとのままだが、そ 最終葉裏及び後表紙裏の奥付の一部を改修。最終葉奥付は第 発行書林 山城屋

通二町目二十番地種工作兵衛 田佐兵衛 と改刻、 水野忠順下に「修来館/蔵版」(朱

空押唐草紋黄色布目表紙(二六・四×一八・一糎)。 「京都大学附属図書館蔵) 二五冊(セシ3) 水野忠宝寄贈本 北島茂兵衛」より「山城屋 稲田源吉」に到る八名を列記する。 後表紙裏の奥付は、下半部分の書林名を改刻して「須原屋 方)の印、稲田佐兵衛下に「玉山/書房」(朱方)の印が捺さ

「京は14明治一四(一八八一)年大阪岡島真七等刊藤沢南岳校14明治一四(一八八一)年大阪岡島真七等刊藤沢南岳校

列国地図」「戦国七雄地図」「秦三十六郡地図」「漢州郡地図」 は体例を異にし、地図は「五帝夏商地図」「周国都地図」「春秋 に同じである。譜系図及び地理図は洋紙銅板刷りで他の諸版と 序末の題署は明刊李光縉増補本(5)及び八尾板初刻本(6) (版心題) (「光緒七年夏日嘉興葉煒松石識/於西京之寄雲楼」) が 上掲八尾板等諸版に同じで黄洪憲の序は無く、茅坤・徐中行二 ある。「自叙」の次に王世貞叙、以下短長説に至る首目内容は 立夏前三日/ 南岳藤沢恒撰」)を冠し、末に「大清葉松石跋 南摩綱紀/ 刻さる。首に 「序」 (「明治庚辰八月/ 蔵版」とあり、上辺上に左から右へ「明治十四年五月刻成」と 簽がある。見返に「藤沢南岳訓点/ホヤ史記評林/ 浪華同盟書楼 「校史記評林 清全国地図」の計見開七図で多色刷である。 ·校訂史記評林序」(「明治十三年庚辰天長節識於東亰/擐碧楼 省軒亀谷行撰/ 桂州伊藤信平書」)、「序」(「明治十三年冬十一月 訓 点 一(一五十)」と題署せる題簽及び目録題藤沢南岳 万菴三兼書」)並に「自叙」(「明治辛巳 薩摩 引用書目までを 重野安繹撰」)、

> 第一 助・岡島幸治郎)の氏名住所が記さる。 巻尾題前一行に「門生等井静仝校」(巻一)等と同校者名(各巻異 字。李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。上層或は欄上に南 補/ (&+) 大日本讃岐藤沢南岳校訂」と題す。四周単辺(一六 巻之一/ (低七) 明 補史記は「校訂史記評林補」と題し、本文巻頭「校訂史記評林 成」とあり、 訓点人 (藤沢南岳)、 出版人 (岡島真七・梅原亀 七・森本太助・ 柳原喜兵衛・ 三木美記・ 前川源七郎・中川 なる)あり。巻末に奥付一葉を附す(版心題「校訂史記評林」)。 版心白口単黒魚尾「校訂史記評林 上行二字有框)。 句点返点附刻、 正文には送仮名・傍注あり。 岳の校語等が有框の「校」字を冠して刻さる(上層行七字、欄 注小字双行廿字。 上層標注行七字、 凌李両氏按語低一格 行 六 ×一〇・二糎、高さ三糎の上層を含む)、有界十一行、行廿字、 明治十三年五月二十八日出版御届/同 十四年五月 冊とし、目録は第二冊首読史総評の前に配さる。第三冊首 呉興凌 稚隆輯校/ (GA) 温陵李 巻之幾(小題)(丁付)」。 光縉増

とある如く、南岳の校注は、藤沢東畡・森田節斎・中井履軒・内馬氏乞以上梓、巻已浩博亦不訾、氏奮乞不已、乃出付之(略)一年而刻成」と刊行に至る経緯が記され、また南摩序に、「版一年而刻成」と刊行に至る経緯が記され、また南摩序に、「版ー年而刻成」と刊行に至る経緯が記され、また南摩序に、「版ー年前一校、并録所聞于先君子与先輩諸説以自娯焉、頃日書肆とある如く、南岳の校注は、藤沢東畡・森田節斎・中井履軒・入田前島氏乞以上梓、巻已浩博亦不訾、氏奮乞不已、乃出付之(略)名曰校訂史記評林、抑余聞之、節斎事東略猶師、屢往来其門」とある如く、南岳の校注は、藤沢東・森田節斎・中井履軒・名曰校訂史記評林、抑余聞之、節斎事東略猶師、屢往来其門」とある如く、南岳の校注は、藤沢東・森田節斎・中井履軒・名目が記述が出る。

った節斎の「太史公序賛飝測」を多く引用する。王鳴盛・呉斉賢等諸家の評説を抄録し、殊に父東畡と親交のあ

た。大正九(一九二〇)年歿。
り、明治六年大阪に出て、父東畡の創設せる泊園書院を再興しり、明治六年大阪に出て、父東畡の創設せる泊園書院を再興しりの賜号。幕末明治期の儒学者で、高松藩学講道館督学とな七香斎主人・九々山人・香翁等とも号した。南岳は高松藩主よる。讃岐の人、名は恒、字は君成、盤橋と号し、別に、醒狂・藤沢南岳、天保一三(一四八二)年東畡の長子として生ま

〈大阪天満宮蔵〉 欠巻五○─五五 中四九冊(15)

/書籍標印不許売買」(朱長方)の印記あり。 黄色布目表紙(一八・四×一二・八糎)。「天満菅廟御文庫奉納

〈国立国会図書館蔵〉 中五〇冊(8823)

さる。 葉松石の跋無く、奥付は本文末葉裏から後表紙裏にかけて刷印葉松石の跋無く、奥付は本文末葉裏から後表紙裏にかけて刷印、黄色布目表紙(一八・三×一二・七糎)。見返右方一部破損。

〈京都大学附属図書館蔵〉 中一○冊(43シ2)

原安修記念金原清左衛門寄贈」(緑長方)の印記あり。 故六止斎金の原清左衛門寄贈」(緑長方)の印記あり。一帙とは別板、「茂史記評林藤沢南岳訓点」(―十)」と題さる。 薄葉紙本。 茶色絹表紙(一八・八×一三・一糎)、題簽は前掲

15明治一四(一八八一)年大阪修道館刊鉛印本

刊行/増訂史記評林/ 修道館」と題さる。首に「修道館本史点 巻首乾(首坤・一―二十五)と題す。封面に「明治十四年修道館と空押せる縹色表紙、題簽、「増訂史記評林 大 郷 穆

記評林、 比。且廉其価直、使窮郷寒生易購獲。其益于世大矣」と。 阪修道館」なる刊記がある。首の重野安繹の序に「山田栄造與 囲の「増」字を冠す。最終葉裏に「明治十四年十月/刊行/大 凌李両氏按語低一格行六字。 版心白口魚尾無し、「増訂史記評 同志胥謀、以聚珍印行諸書、普恵後生。命曰修道館本。首刻史 上層評注は返点のみ)、原有の旁注は無い。李氏増評頭には墨 林○巻幾(灬麗)(丁付)○修道館」。句点返点送仮名付印 十四行、行廿二字、注小字双行、行卅七字、上層標注行七字、 双辺(二四×一五·八糎、高さ二·八糎の上層を含む)、無界、 第二行低一格「五帝本紀第一 (○格) 伊地知貞馨点」と題す。 署程式は明版李光縉増補本(5)、寛永一三年刊八尾版初刻本 冠し、「史記評林叙」(王世貞)以下首目内容は上掲八尾板諸本 記評林序」(「明治辛巳十二月一等編修官従五位重野安繹撰」) (6)に同じ。本文巻頭、「史記評林巻之一 (○格) 温陵李光縉増補」、 第二冊首、読史総評の前に配さる。尚、茅坤・徐中行序末の題 に同じで黄洪憲の叙は無く、引用書目までを首冊とし、目録は 而八尾版較佳。今此本依仿之、訂文字正訓点、 俾予序之。坊本評林、有紅屋八尾諸版、 非復旧版之 大抵疎謬難

図は整版である。 本版は八尾板に倣いながら、文字訓点にやや改正を加えてあ

二六)年薩摩藩士堀右衛門が三男として生まる。堀仲佐衛門と郎・壮之丞、恒庵と号す。幕末維新時の国学者。文政九(一八伊地知貞馨、通称は徳之助・又十郎・仲左衛門・次郎・小太

球藩在勤となる。一四年修史局編修に任ず。沖縄志五巻の著述 じ藩政改音に従う。四年以後琉球国制度変革のことに与り、 変名し国事に奔走する。鹿児島藩小参事、明治元年、 がある。明治二○(一八八七)年四月一五日歿、享年六十二歳。 称したが、のち伊地知貞馨と改めた。維新の際には堀小太郎と 〈京都大学文学部蔵〉 大二七冊(音BC 9-) 参政に任 琉

〈京都府立総合資料館蔵〉 大二七冊(和卯52)

「京都/府立/図書/館印」(朱横長方)の印記あり。

〈都立中央図書館蔵〉 大二七冊(22M21) 建〈大阪府立中之島図書館蔵〉 大二七冊(2426) 〈東北大学附属図書館蔵〉 大二七冊(狩35927) 狩野文庫

四 入セル文学博士/狩野亨吉氏旧蔵書」(朱長方)の印記あり。 〈斯道文庫蔵〉 欠巻四○―四三、九七―一○五、一一二―一二 「狩野氏図書記」 (朱長方)、「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ/以テ購 大二三冊 (2252)

「田中氏/蔵書印」(朱長方)の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 大二七冊(2735)

印」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記あり。 ある。「出版届」下方に「定価金六円」と。「大政/官記/録 年一月出版」とあり、以下訓点者、出版者名を銘記せる奥附が 末冊後表紙裏に、 「明治十四年六月廿八日出版届 / 同 十五

空押卍つなぎ黄色布目表紙 (一八・八×一二・八糎)、「新刻史 16明治一 四 (一八八一) 年東京印刷会社刊鉛印本

> 記評林 ○・三○・四○・五○冊末葉に奥附があり、「明治十四年十月 ・三○・四○・五○冊末葉に奥附があり、「明治十四年十月 茅・徐両序末の題署体式は明板李光縉増楠本(5)・寛永一三 り短長説に至るまで上掲八尾板初・再・三刻本等に同じ。但し、 史記評林/東京印刷会社版」と題さる。序目内容は王世貞叙よ 年八尾板初刷本(6)の体式に同じく、目録は第一冊末、 版心白口単黒魚尾、「史記巻幾 (小題)(丁付)」。 記一巻は第三冊首に配さる。本文巻頭題署体式は「史記評林巻 書目後にあり、第二冊に読史総評及び短長説二巻を収め、補史 の「増」字を冠す。句点返点送仮名付刻(標注は返点のみ)。 む)、無界、十二行、行十八字、注小字双行、行廿三字、上層 す。 四周単辺(一五・八×一○・四糎、 高さ二・九糎の上層を含 之一 (格) 温陵李光耀增補」、第二行低一格「五帝本紀第一」と題之一 (隔五) 呉與凌稚隆輯校」、第二行低一格「五帝本紀第一」と題 標注行六字、凌李両氏按語低一格行五字、李氏増評頭には墨開 巻之一(一五十)」の題簽がある。封面、「明治新刻) 第一〇・二 引用

(国立国会図書館蔵) 中五〇冊 186 30

279 37 〈内閣文庫蔵〉 欠首至巻一、巻八・九、三一一六〇 中三六冊

の印記がある。 「太政/官記/録印」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)

〈都立中央図書館蔵〉 中五〇冊 (特 6606

方)。「停春/楼図/書章」(白方)、「塚越文庫」(朱長方) 奥付無し。巻一二尾題下に「製本師高嶋銑蔵」 の鈴印 (朱長

記あり。

凡蔵〉 中五○冊(特師) 清水文庫

年東京報告社刊鉛印本17標史記評林 明治一六(一八八三)——一八(一八八五)

李 光經增補」、 第四行低一二格「日本 巻頭「標史記評林巻之一」第二・三行低一二格に「明 のみ)。版心白口単黒魚尾、 点圏点返点送仮名及び傍注あり(割注は句点返点、 凌李両氏按語低一格行七字、層格の有井増評並按語行五字。 第五行低一格「五帝本紀第一」と題す。 四周双辺(二一・六× 史総評との間に配さる。 第二冊首に「標補史記」を配し、本文 三年刊八尾版初刻本(6)の体式に拠り、目録は引用書目と読 茅坤・徐中行両序末の題署は明刊李光縉増補本(5)、 同じく(黄洪憲の叙は無い)、短長説までを第一冊に収める。 の二序を冠し、王世貞叙以下の首目内容は上掲八尾板諸本等に 東京 十三行、行廿四字、注小字双行、行卅三字、上層標注行八字、 一五・一糎、高さ二・九糎の上層を含む)、上欄上に更に、 序」(「明治十六年六月中浣/阿波 告社蔵版」と題さる。首に「新刊史記序」(「明治十六年六月/ ・八糎の層格を設け有井氏の補評並に按語が標記さる。 封面には「明治十六年六月新刊/補標史記評林/東京 簽、「標史記評林 島田重礼撰/(印)(印)/河邨靖書(印)」、「史記補標 一 (一二十五)」と題署、 一補標 岡本監輔撰/(印)(印)」) 史記評林卷幾 阿波 有井範平補標」、 目録題簽を付 標注は句点 (小題) 寛永一 高さ

付)」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊付)」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊付)」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊付)」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊付)」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊付)」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊の東付)。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊の東付)。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊の東行)。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊の東行)。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊の表記の記述は、第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊とあり、本版は明治十六年六月より、十八年七月にかけ二ケ年とあり、本版は明治十六年六月より、第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊とあり、本版は明治十六年六月より、十八年七月にかけ二ケ年とあり、本版は明治十六年六月より、第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊とあり、第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊とあり、一次に対している。

課・東京師範学校に歴任。明治二二(一八八九)年五月二二日 思等明末清初諸家の評説を輯め「範案」として私見を交える。 如く、補標には陳仁鍚・鄧以讃・陳子龍・徐孚遠・鍾惺・呉見 学、柴碧海之門人。 岩本贅庵高足弟子、 歿、享年六十。著に「論語論文」「史記評註」「進斎遺稿」がある。 経て、明治七年以後教職を以って長崎師範学校・参謀本部編纂 につき経史を究む。寺島学問所素読方、西の丸長久館助教授を 生。那波鶴峯に師事、算術を小出長十郎に学び、のち岩本贅奄 於古今諸家、間以己見補之、 井進斎、就明凌以棟史記評林、訂正謬誤。其評論未備者、折衷 〈内閣文庫蔵〉 有井進斎、通你範平、 首の岡本監輔「史記補標序」に「報告社長大野堯運、 二五冊 279 38 阿波徳島の人。天保元(一八三〇)年 命日補標。 於予為同門。」とある 進斎者、故徳島藩文 謁我有

空押行成文艶出黄色表紙(二六・八×一八・四糎)。「太政/官

記/録印」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記あり。

〈斯道文庫蔵〉 二五冊(22.625)

二〇冊の奥付なし。 空押卍つなぎ香色布目表紙(二六・六×一八・五糎)。第一六・

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五冊(33:11)

二〇冊の奥付なし。「和田/蔵書」(朱方)の印記あり。 空押卍つなぎ香色布目表紙(二六・八×一八・六糎)。第一六・

〈無窮会図書館蔵〉 欠巻六・七 二四冊(真軒師)

17明治一九(一八八六)年東京九春堂印本あり。「田孝/之印」(白方)、「槃山/蔵書」(朱方)の印記あり。書よりの抄録・案語等の書入が周密。朱句点朱引、朱藍圏点書入冊の奥付なし。欄外余白及び付簽に朱墨筆で「蠡測云」等と諸一の東代なし。欄外余白及び付簽に朱墨筆で「蠡測云」等と諸の東省を表表(二六・八×一八・五糎)。第一六・二〇

春堂)の住所氏名が記され、裏葉より第二葉にかけて、「九春御届再版」とあり以下補標者、出板人(丸谷新八)、発兌所(九に「全二十五冊/定価金拾円」と刻さる)/同十九年十月六日「明治十六年四月廿日板権免許/同年六月出版(この二行下方五・一〇・二〇・二五冊の末二葉に奥付があり。 第一葉表に題簽は題署程式原刊本に同じくも、目録題簽ともに別版。第

〈内閣文庫蔵〉 二五冊 (293)

堂出版書目」がある。

空押卍つなぎ香色布目艶出表紙(二六・七×一八・六糎)。

18明治一五(一八八二)・一六(一八八三)年東京鳳文館

刊石川鴻斎等輯校本

葉を附綴。第五・一○・一五・二○・二五冊末に奥付があり、示さる。各巻尾題下方に「岡→石四・同校」と。巻末に正誤表二文には墨囲の「補」字を冠し、「帰震川日」、「方苞日」等と標 巻幾 評の前に配さる。第二冊首に補史記があり、 九月出版」とあり、 第二五冊末には「明治十五年十二月四日出版御届/明治十六年 名圏点、まれに傍注付刻。上層の標注の中、 字、上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。李氏增評頭 の上層を含む)、有界、十三行、 行廿四字、 注小字双行行卅六 評林巻之幾巻」。 四周単辺(一八・八×一二・四糎、高さ二・八糎 評林卷之一 (隔七) 温陵李光網增補 桐城方苞 增評 / (格一) 五帝本紀第 尾板初刻本(6)の体式を襲い、目録は引用書目の次、 目内容は上掲八尾板等諸本に同じ。黄洪憲の叙は無く、 には墨囲の「増」字を標す。版心白口単黒魚尾、「蛸魚史記評林 一」と題す(巻四首題には「蛟☲」と角書あり)。尾題は「史記 両序末の題署程式は明刊李光縉増補本(5)、 寛永一三年刊八 ある。巖谷序に続き王世貞叙、以下短長説までを首冊とし、 十六年歳次癸巳秋八月上澣/鴻斎石英撰并書」、巳は未の譌)が 歳小春/巌谷修題」の序を冠し、巻末に「史記評林跋」(「明治 刻/
解点史記評林/東京
鳳文館」と題す。 首に「明治壬午之 空押卍繋黒色布目表紙 (二三×一五・三糎)、題簽、「増補史記 (ハ題)(丁付) 鳳文館蔵」。句点返点、正文には更に送仮 第一 (一廿五) 冊」と題さる。 見返に「明治十五年新 続けて、輯校人石川鴻斎、出版人山中市兵 帰震川・方苞の評 本文巻頭、「史記 茅・徐 読史総

年に亘って刊行されたものであろう。

「用とする。見返の刊年をも鑑み、本版は明治一五・一六年の両第一○冊は同十六年一月、第一五冊は同三月、第二○冊は同七式もほぼ同様ながら、出版年月を第五冊は明治十五年十二月、 第一、前田園、印刷所鳳文館の姓名住所が記さる。他の奥付の程

相与助之。編摩歳月、漸得竣功焉」と。「武昌張裕釗所刻」とは 刻史記評林。 続上梓」と。また鴻斎跋に「頃見武昌張裕釗所刻明帰震川及清 非浅鮮也。二子近開鳳文館、損重貲、鳩良工而通鑒韵府諸書、 田二子、獲 方望溪評点史記。其叙事好処(中略)鳳文館主前田士方、 史記一三○巻例意一巻附方望溪平点史記四巻 首の巌谷脩序に「史記評林、旧刻数板、皆不免魯魚。 明帰〔有光〕評 一善本、附以帰・方二家評点、公之於世。其益後学、 余乃迻写張本、併校正旧刊。巖谷誠卿・岡振衣、 (附) 清方〔苞〕評点 清張裕釗等校 〔漢司馬遷〕 撰 山中·前 将改 陸 清

のことで、上層の帰・方両評は此本に拠ったものである。 光緒二(一八七六)―四(一八七八)年刊(武昌張氏)

月十三日病歿、享年八十六歳。来す。文章家、南画家として知らる。大正七年(一九一八)九河豊橋の人。後横浜に出で清客と交り、欽差大使何如璋等と往石川鴻斎、字は君華、別に芝山外史、雪泥処士等と号す。三

(国立国会図書館蔵》 半二五冊(183 Rs)

め。「亀田/蔵書」(朱方)、「本亀田/蔵書印」(朱長方)の印記

〈慶應義塾図書館蔵〉 半二五冊(×1-62)

の印記あり。第一五冊の奥付は第一〇冊の奥付を誤綴。「剴/南」(朱方)

て、東京銀座博聞本社より、羽前国山形荒井太郎に至る二十七 本舗、大坂鳳文館支舗を記し、此奥付裏葉より後表紙裏にかけ 中市兵衛の姓名住所を欠き、印刷所を発兌所とし、東京鳳文館 奥付は無く、 解題は略す。 及び富山房漢文大系本(20)があるが、洋装活版本である故 方)、「仙/栗」(朱方)、「狩野博士集書」(朱長方)の印記あり。 の売捌書舗が列記さる。 未」と改正。巻末の正誤表無し。第五・一○・十五・二○冊 〈東北大学附属図書館蔵〉 一跋」字なく「史記評林」とのみ題し、末の撰書年干支を「癸 明治期刊行の評林本史記には他に、東京同盟出版書房本 (19) 首に石川鴻斎跋を冠し、 末冊の奥付は前掲両儲蔵本とは異板で、 「岡村寛」(朱小円)、「岡寛/印」(白 半二五冊 巌谷修序を欠く。 (狩3 26601 25 鴻斎跋首題下 狩野文庫

0

瑞楼刊石印本 中二〇冊二帙 21百五十名家評註史記 民国一二(一九二三)年上海文

索隠序」・同後序・「補史記序」・「史記正義序」・同集解叙・同有る。 首に王世貞・茅坤・徐中行の三序を冠し、以下、「史記書扉を有し、その裏に「癸亥秋上海/文瑞楼石印」なる刊記が書所を有し、その裏に「癸亥秋上海/文瑞楼石印」なる刊記が清が色表紙(二○×一三・一糎)、題簽「亩五評註史記」海文瑞

九糎)、 あり、 評註史記」とする。 王世貞叙に「百五十名家評註史記叙」、 凡 瑞楼書籍広告各一葉を附す。 上象鼻右に「百五十名家評註史記」、魚尾下に巻次、小題丁付 例に「百五十名家評註史記凡例」と題すが如くである。本文巻 巻を欠き、「史記評林」と題すべきところを全て「百五十名家 総評・目録・「百五十名家評註史記補」と続き以上を第一冊に 末にはなく、大半は尾題を欠き、各巻末に直接し次巻の首題が 巻数下に「終」字があるが、第九、十一、十四、十六、十九冊 がある。 行七字、或は六字。正文に句点を付す。版心小黒口単黒魚尾、 頭 収める。内容順次とも史記評林諸本にほぼ同じくも、短長説二 正 義論例· (略一) 五帝本紀第一」 と題す。 四周双辺 (一五・六×一〇・ 「百五十名家評註史記卷之一/ (g二) 漢太史令龍門司馬遷著 巻首毎に改葉はしない。第一〇・二〇両冊末に、上海文 有界、十六行行卅二字、注小字双行卅二字、 尾題は各冊末に当る巻にのみ、首題と同程式で題され 同列国分野・譜系図地理図七葉・凡例・姓氏・読史 眉上標注

かず、本項は池田英雄氏御所蔵の本に依って記した。下人所輯の評注及び按語であろうが現今架蔵する儲蔵機関を聞いる。当時通行せる俗本であろうが現今架蔵する儲蔵機関を聞き光縉の輯校・増補者名の題署はないが、眉上標注は明らかに本版は、李光縉増補史記評林の改題本で、巻頭には凌稚隆・本版は、李光縉増補史記評林の改題本で、巻頭には凌稚隆・

おわりに

史記評林は明万暦初年に刊成してより、中国本 土に 於いて

は、 るに過ぎない。 (注24) 銭泰吉、周中孚等が校勘の比較的優れていることに注目してい 刊)の方が、むしろ通行した。また、 勝るとも劣るものではない。此事は水沢博士も諸本との校勘の び其の他の善本を参校したのであって、校訂にも充分意を用い 校者自ら凡例に銘記している如く金台汪諒刊本をもとに宋本及 次の逓修を経てはいるものの、 書と見做され、 隆に伴い、評論の蒐輯を趣意とせる本書は、読書人の間では俗 とになった一因とも考えられる。清に入ってからは考証学の興 通読に簡易なる俗書が潑出流行したことが本書の通行を阻むこ を加え、評林所輯の評論を抄録し、正文をすら恣意に節略し、 編の史記彙評等、評林の体裁に倣った諸本が出、 本、黄長吉編刊本、陳子龍・徐孚遠撰の史記測義、葛鼎・金蟠 めて多い南監本(嘉靖九年初刊・万暦三年再刊・同じ 結果、裏付られたことである。にもかかわらず、删略誤脱の極 ており、テキストとしてみても明代に刊刻された諸本に比して 重刊されたことがない。本書の正文・三注について言えば、輯 万暦中に両度、 殆ど無視されて顧られることは無かった。 翻刻或は増補覆刻されたに止まり、 明末より清季に至るまで絶えて 明末に及び、 むやみに批点 一四年再々 鍾人傑刊

評林本に限られることとなり、幕末までに計五度、明治期に十がら詳かにはできないが、以後、我国に於ける倭版史記は殆ど当って、古活字版を捨てて明版史記評林を採った経緯は残念な長古活字版があるが、寛永一三年、八尾が初めて整版に上すに本書は寧ろ日本に於て通行した。先行せるテキストとして慶

に示していよう。 下げとなった一件(裁配帳二番史記出入一件)等は此事を如実願株に対して、八尾板支配人敦賀屋九兵衛等が差構え、遂に願大坂書林奈良屋長兵衛等が得た「史記評林論文入及び点付」の人が重版・類版の防止に努めた結果と考えられる。寛政初年に戸期にやや少くも感じられるが、一つには八尾紅屋両版の支配度の覆刻乃至翻刻をみたことは、縷述して来た如くである。江

盛行の有様を語るものである。

三)との嘆きは書誌学者としての至言であろうが返って本書の
ニ今行本徒ニ評林本ヲ加点翻刻スルノミ世ノ安者何ゾ古ニ稽へ
は汲古閣本等の唐本をも手にしたであろうが、一般には和刻評
は汲古閣本等の唐本をも手にしたであろうが、一般には和刻評

戸後期に入ると三注をも削り去った次の二本が刊行されてい戸後期に入ると三注をも削り去った次の二本が刊行されてい之十)に於て説く如く、評注を蛇足無用とする見地があり、江一方、 太宰春台が「書史記評林後」(春台先生紫芝園後稿巻

また、小田原藩は清版の覆刻により次の一本を出している。

文政九 (一八二六) 年刊 (小田原藩 天游園蔵板) 史記論文一三〇巻 漢司馬遷撰 清呉見思評点 呉興祚校

ず、明治期の通行本は大半が評林本であった。しかしながら、此等とて到底史記評林の盛行を阻むには及ば

いであろう。

伊藤東涯・東所・東峯、中井履軒、三村崑山、皆川淇園、松野藤東涯・東所・東峯、中井履軒、三村崑山、皆川淇園、松田であろう。

上げる。 本稿は阿部隆一を代表者とする「国書並に漢籍総目録の編本稿は阿部隆一を代表者とする「国書並に漢籍総目録の編集を映る。 単に、池田英雄氏には貴重なる御蔵書を快く関庫をはじめとする公私の図書館・文庫各位に対し、心から厚く体って成ったものである。此に銘記して謝意を表する。また、集」のための調査結果の一端であり、トヨタ財団研究助成金に上げる。

注

輯 高世魁校 明嘉靖一六(一五三七)年刊(福州知府胡有唐司馬貞索隠 張守節正義 明楊慎等標注 明楊慎・李元陽1 史記題評一三〇巻首目一巻 漢司馬遷撰 劉宋裴駅集解

内閣文庫蔵本大六○冊(欠巻一・二七、有補鈔)がある。恒・胡瑞敦) 斯道文庫蔵本大七○冊(欠首三巻、有補鈔)、

順之選評明「嘉靖」刊 内閣文庫蔵大四冊 湖川先生精選批点史記(『録題)不分巻 漢司馬遷撰 明唐

→ 「」。→ 「」。○)年序刊(吳興閔振業) 朱墨套印 内閣文庫蔵大二四 3 史記鈔九一巻首目一巻 明茅坤評並輯 明泰昌元(一六二

蔵大二四冊補 朱日爃校 明万暦四六(一六一八)年序刊 内閣文庫4 史記〔輯評〕二四巻 漢司馬遷撰 明鄧以讃輯評 陳祖苞

文庫蔵大一三冊 錫彙纂 鍾惺編定 劉肇慶校 〔明末〕刊(天絵閣) 内閣 5 史記奇鈔一四巻首一巻附報任少卿書 漢司馬遷撰 明陳仁

(一六三六)年序刊 内閣文庫蔵大一四冊漢司馬遷撰 明孫〔鉱〕評 馮元仲編 馮膚等校 明崇禎九6 孫月峰先生批評史記一三○巻首目一巻附褚先生附余一巻

撰 明萬鼎·金蟠編 明崇禎一〇(一六三七)年序刊(劉仲- 史記彙評(序題)一三〇巻輯注一三〇巻首目一巻 漢司馬遷

白等) 内閣文庫蔵大一六冊

之煥編 孫承宗校 明万暦三四(一六〇六)年刊(三建喬木8 梅太史訂選史記神駒四巻附報任少卿書 漢司馬遷撰 明梅

山房) 内閣文庫蔵大四冊

9 新刻霍林湯先生評選史記玉壺氷八巻附報任少卿書 明湯

内閣文庫蔵大三冊、蓬在文庫蔵大三冊 10 史記綜芬評林三巻附報任少卿書 [漢司馬遷] 撰 明焦竑選 [賓尹] 編 [明万曆] 刊(宝善堂) 内閣文庫蔵半四冊

四冊維嶽選並旁訓 〔明末〕刊(温陵楊九経) 内閣文庫蔵大11 新鐭鄭袞如先生精選史記旁訓便読八巻 漢司馬遷撰 明鄭

永代売渡申板木之事 (大坂本屋仲間記録第十巻)の次の記録。

一 同 古 板 同点付 同 中記評林 八尾板 四軒之壱軒前

一同鷦份的

一 同 助字法

我等罷出埓明可申候、為後日売上一札依而如件お違乱妨申者無御座候、万一故障有之候ハヽ、何時ニ而も実正也、則代銀慥ニ受取申候、然ル上は右株式ニ付、外方我等以世話其許殿へ代銀七貫五百目相定、永代売渡申候所 北度

慶応元年丑九月

丸屋善兵衛

秋田屋太右衛門殿

16 管見に入れる史記考の諸所儲蔵本は次の如し。

陳明卿〔史記考〕 明陳仁鍚撰 闕名者校点 延宝二

本文巻頭、「陳明卿五帝本紀考」と題す。四問単辺(一九×(一六七四)年刊(京 八尾甚四郎友春)

の。 一六・二糎)、高さ三・九糎の上層あり。無界十二行、行十九 一六・二糎)、高さ三・九糎の上層あり。無界十二行、行十九 一六・二糎)、高さ三・九糎の上層あり。無界十二行、行十九 一六・二糎)、高さ三・九糎の上層あり。無界十二行、行十九 本文巻頭、「陳明卿五帝本紀考」と題す。四周単辺(一九× 本文巻頭、「陳明卿五帝本紀考」と題す。四周単辺(一九×

六・九×一八・九糎)、題簽欠落。 〈神宮文庫蔵〉 二冊(五乙二い間)。空押菊花紋緑色表紙(二

八×一九·三糎)、「史記考」と墨書さる。 巻末の刊記は剜去〈慶應義塾図書館蔵〉 一冊(7161)。改装香色表紙(二六・

糎)。欄上にまま墨筆の校字書入あり。「居畎畝丘/中以楽/

(2246)。香色表紙 (二六·六×一九·七

(内閣文庫蔵) 五冊

又 享保二(一七一七)年印(京 金屋半右衛門)

二×一八・九糎)。 一×一八・九糎)。 本文末の原刊記を削り、「享保弐」西霜月吉日/ 京堀川通本国寺前/ 金屋半右衛門求版」と改刻。 京堀川通本国寺前/ 金屋半右衛門求版」と改刻。 京堀川通本国寺前/ 金屋半右衛門求版」と改刻。 「国立国会図書館蔵》 五冊合三冊(16147)。香色表紙(二六・ 京堀川通本国寺前/ 金屋半右衛門求版」と標記 大区画に圏で囲み、「本記」、「表」、「世家」、「列伝」と標記 と標記

(朱長方)の印記あり。一八・七糎)。「南葵/文庫」(朱方)、「島田氏隻/桂楼収蔵」一八・七糎)。「南葵/文庫」(朱方)、「島田氏隻/桂楼収蔵」へ東京大学総合図書館蔵〉 五冊(30位)。 濃縹色表紙(二六×一八・七糎)。〈無窮会蔵〉 五冊(宮川)。 濃縹色表紙(二六×一八・七糎)。

(二七·二×一八·八糎)。 (大阪府立中之島図書館蔵) 五冊 (3220①)。 香色艶出表紙

〈同蔵〉 五冊(33222)。濃縹色表紙(二六·九×一八·八糎)。

(朱長方)、「日本/政府/図書」(朱方)、「内閣/文庫」(朱坂/学問所」(墨長方)、「大学/蔵書」(朱方)、「浅草文庫」「述斎衡/新収記」(朱長方)、「林氏/蔵書」(朱方)、「昌平□□道」(白方)、「源印/乗衡」(白方)、「蕉/隠」(朱方)、□□道」(白方)、「源印/乗衡」(白方)、「蕉/隠」(朱方)、

六・七×一九・二糎)、原題簽無く書題簽、「陳明卿史記考」と〈国立国会図書館蔵〉 五冊 (222.03-Si229T5t)。香色表紙 (二方)の印記あり。

墨書。「内池家蔵」(朱長方)の印記あり。

八・一糎)。巻末の刊記を削去。「高氏/収蔵/図書」(朱方)<大東急記念文庫蔵〉 五冊(凹3)。香色表紙(二五・七×一

方)の印記。 おの印記。 方)の印記。 方)、「荒井泰治氏ノ寄い。「下埜国/渡部氏/蔵書印」(朱長方)、「荒井泰治氏ノ寄北帝国/大学図書」と空押さる。 原表紙は茶色、 原題 簽 同押卍つなぎ茶色覆表紙(二五・五×一八・三糎)、 中央に「東押卍つなぎ茶色覆表紙(二五・紅糸35555) 狩野文庫。 空の印記あり。

17 裁配帳第二番史記一件出入(大坂本屋仲間記録記第九巻)

并古板点付株史記評林無点

に

板元 柏原屋源兵衛 柏原屋寿左衛門 奈良屋長兵衛

文添、当地奈良屋長兵衛へ求板京小川多左衛門・林伊兵衛両人ゟ、京行司割印有証寛政元酉五月求板

18 同じく

永代売渡申板木之事

史記評林無点丸株 半分板木三百三拾弐枚有・ディーテジョ・ポファミュ

一 同 点付株 八尾元板

同 正文 十軒之一軒前、尤白板二而取等

同 觽 十軒之壱間前

同 助字法 十軒之二軒前

同 論文願株 四歩半

為後日売渡一札仍而如件 為後日売渡一札仍而如件 為後日売渡一札仍而如件 為後日売渡一札仍而如件 一、右史記評林へ差構候ニ付、此度及出入候処、御行 司中之御取扱を以、代銀拾六貫五百目并ニ樽代金五拾 司中之御取扱を以、代銀拾六貫五百目并ニ樽代金五拾 司中之御取扱を以、代銀拾六貫五百目并ニ樽代金五拾 一、右史記評林之儀ニ付、外ゟ違乱妨申者無御座候、 の、右史記評林之後に付、此度及出入候処、御行 の、右史記評林之儀に付、外ゟ違乱妨申者無御座候、 が、上

寛政四子年正月

柏原屋与左衛門印柏原屋清右衛門印奈良屋長兵衛印

増田屋源兵衛印

井筒屋伝兵衛殿敦賀屋九兵衛殿

水代売渡申板木之事

史記評林無点半株 残り板木百六拾六枚

同 点付株 八尾元板半株

同 正文 廿軒之壱軒、白板二而取筈

同 觽 廿軒之壱軒前

同 助字法 十前之一軒前

同 論文願株 弐歩弐厘五毛

申者無御座候、為後日売渡一札仍而如件取申所実正也、然ル上ハ、右板木之儀ニ付外ゟ違乱妨し候処、此度代銀五貫目ニ相定永代売渡、則代銀慥請右之板木并焼株願株、奈良屋長兵衛殿ゟ買請所持いた

寛政四子年正月

敦賀屋九兵衛印八尾板支配人

井筒屋伝兵衛印

紅屋板元中

覚

同一番(同)に

19

とみえる。

之内敦賀屋九兵衛・河内屋嘉市方江右之写本御廻し可候、以来右之末書等之開板御願物御座候節者、御仲間一史記評林八尾板丸板株之内、半株私共買請所持仕罷有

寛政元年酉九月十九日

被下候、此段御断奉申上候、以上」

雑喉屋三郎兵衛印

御行司中様本屋仲間

と、又、同二番史記一件出入に

史記評林 八尾板

板元 弐歩半 井筒屋伝兵衛支配人 河内屋嘉市

弐歩半

敦賀屋九兵衛

寛政元酉九月求板

京都ゟ求板

之節ハ八尾板へ応対有筈といふ、京都行司割印有右敦賀屋へ之売上証文斗ハ無点古株ニ而、再板有

とみえる。

月の条に20 出勤帳五十四番(大坂本屋仲間記録第五巻)嘉永五年閏二

聞済遣し出銀請取、夫~印形取置候事一敦九ゟ、手代彦七義別家加入之義、同人請人ヲ以願出

とみえる。

21 同三十七番文政九年九月の条に

屋新兵衛ト改名致、此度別家加入願出候、出銀受取帳一秋田屋太右衛門下人清助、年季無滯相勤候ニ付、秋田

又三十八番文政十年四月に面印形取相済候事

銀請取諸帳帳紙致シ遣し候事、但し秋太印形も取有之秋田屋新兵衛、堺屋新兵衛ト家号改メ願出候ニ付、出

とみえる。

板屋孫兵衛印

に依る。 [明治] 写 況斎叢書二十四之内 国立国会図書館蔵2 史記伝本攷 [明治] 写 況斎叢書二十四之内 国立国会図書館蔵

世日に 世日に 出勤帳二十六番(大坂本屋仲間記録第二巻)文化八年十月

〜帳合致置候事取候ニ付、板木支配人河内屋嘉助ゟ買板部銀受取、夫甲と記紅屋板、糸屋市兵衛所持之板木、酢屋六左衛門買

とある。

其輯評之得当与否、儘可存而不論」と述べている。 其輯評之得当与否、儘可存而不論」と述べている。 以多為貴、不免瑕多于瑜。其書之可取者、転在正文及注」と 以多為貴、不免瑕多于瑜。其書之可取者、転在正文及注」と 以多為貴、不免瑕多于瑜。其書之可取者、転在正文及注」と

25 春台の所論は左の如し。

匯十一二耳、余去之可也。李光縉何為者而増補之、吾悲其意者、皆無益於史学、而徒煩読者。要之凌氏之為斯也、其用者蛇足。其載弇州擬短長説、李滄溟擬秦王辞、則為戲謔。此三隠述賛極無味。其評林則為無用。其載三皇本紀、則為馬史之凌以棟著史記評林、旧註之外、増附索隠正義則猶不悪。唯索

序以揚扢凌氏之挙、抑何意哉。予嘗怪焉。塗抹之、悪其労目也。嗟乎、王元美・徐子与好古之士、而云。(中略)予嘗得史漢評林而読之。 見其譏評之無用者、

追記

- 邦儲蔵する所を聞かず未見。 三年(一八七四)長沙魏氏養翮書屋刻本」を著録するが、本 編並出版 一九八三年、一九六二年刊本の影印)は「同治一 1 近時公刊された、北京師範大学図書館中文古籍書目(同館
- 石印 一二冊」が著録さるるも未見にして委細未詳。2 右同目には更に、「光緒二七年(一九〇一)上海天章書局
- 993.2 (佐賀県立図書館蔵》 欠首―巻三、五六―七七 二四冊(鍋

入稿後、出張調査の機を得たので此に補記する

3

藤」(朱方)の印記。 「弘道/館蔵/書印」(朱方)、「亀/峯」(白方)、「鍋島/家 一九第一~四葉、巻四三第九~一二葉等他葉に較べ印面清 を墨書さる。本文句点のみを残し返点送仮名旁注等を削除。 「弘道/館蔵/書印」(朱方)、「亀/峯」(白方)、「鍋島/家 で記道/館蔵/書印」(朱方)、「亀/峯」(白方)、「鍋島/家 で記道/館蔵/書印」(朱方)、「鬼添無く、「史記 幾」

4 神宮文庫蔵本の後に次の一帙を追補する。

〈市立飯田図書館蔵〉

二五冊 (310)

薄茶色表紙(二六・八×一九・二糎)、題簽角書は「新版考

り。「下伊那/郡飯田/図書館」(朱方)の印記。一部に朱引句点圏点が附され、欄上に朱墨の校語等の書入あ正」とあり、 下方の巻次数は無い。 目録外題が墨書さる。

都立中央図書館蔵本の前に次の一帙を追補する。

〈太宰府天満宮蔵〉 五〇冊(天満宮23)

長円)の印記あり。 香色表紙(二七・三×一九・五糎)、題簽殆ど剝落し書外題 香色表紙(二七・三×一九・五糎)、題簽殆ど剝落し書外題

小鳥居家培) ケ短長説・読史総評二四冊(天満宮窓・6 神宮文庫蔵本の後に次の一帙を追補す。

六寅年六月吉旦 執行坊信誠調」と署さる。 尾に「執行坊蔵本(或は書)」と墨書あり、首冊尾に「寛政縹色、「新版考正」と角書あり。但、大半が剝落。ほぼ毎冊空押蓮花紋濃縹色布目表紙(二七·五×一八·二糎)、 題簽

> (39) 〈市立飯田図書館蔵〉 欠巻二―四、一〇七―一二五 二一冊7 内閣文庫蔵本の後に次の一帙を追補する。

豊喬市立図書館蔵より爰こ欠り一失と浦記する。書庫」(朱方)、「下伊那/郡飯田/図書館」(朱方)の印記。筆の校語書入あり。「呉観/艸蔵」(朱方)、「飯田城/主堀氏幾」。一部に朱引圏点、青筆句点が附され、まれに行間に墨幾」。一部に朱引圏点、青筆句点が附され、まれに行間に墨

8 豊橋市立図書館蔵本の後に次の一帙を補記する。

方)の印記あり。 本色表紙(二七・四×一八・六糎)、目録外題が墨書さる。 「呉観/艸蔵」(朱方)、「下伊那/郡飯田/図書館」(朱 一部に朱句点圏点を附され、訓点訂正、校字等の書入がなさ 本色表紙(二七・四×一八・六糎)、目録外題が墨書さる。